

身も心も ジャズ



BODY & SOUL

オーナー

関 京子





新宿百人町時代の唯一の写真

【六本木店時代（改装前）】

写真はほとんど雲散霧消（72 ページ参照）
 ガラクタの中から出てきた中で、損傷が
 少ない写真を、撮影が古い順に並べました。



六本木に移転
 （亡母と息子）



六本木に移転した頃



改装前のカウンター棚



改装後のカウンター棚
 ペコちゃんと



【六本木店時代（改装後）】

エディ・ゴメスさん
スティーブ・ガットさん

アート・プレイキーさん
右の鉄扉が南青山店に
移設されています

ジョージ・
ベンソンさん



ケニー・パロンさん



エディ・ゴメスさん
ジェルミー・スタイグさん
横山達治さん

【北青山店～南青山店時代】



ジミー・スミスさん
(トミー・キャンベルさんの叔父様)



ケニー・バレルさんと
ジョージ・ムラーツさんの
「二人羽織」演奏



土岐英史 日野皓正 植松隆夫さん



ハービー・ハンコックさん

グラディ・テイトさん

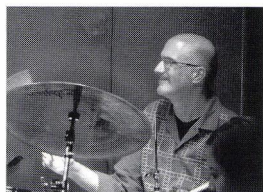
【南青山店時代】



ナンシー・ウィルソンさん



ハンク・ジョーンズさん
マーカス・ミラーさん



ドラムを叩く
マイケル・ブレッカーさん

NY フィル指揮者
アラン・ギルバートさん



小曽根真さん



近藤和彦 中村健吾 奥村晶さん



32 回目の開店記念日に生まれた
孫のレイくん(鈴太郎)も今はもう9歳。
孫の成長は、嬉しくもあり寂しくもあり…

ジャズクラブ ボディ&ソウルの40年

身も心もジャズ

オーナー

関 京子

セットリスト

はじめに ■ ♪ I Can't Get Started

5

店名と社歌 ■ ♪ Body And Soul

8

そうこうするうちに ■ ♪ As Time Goes By

15

どさくさにまぎれて ■ ♪ Moanin'

21

若気の至り □ 1 □ 2 □ 3 ■ ♪ Blame It On My Youth

27

いろんな出会い ■ ♪ Ebb Tide

41

ピアノの履歴 ■ ♪ I Should Care

49

私がジャズに飽きないのは ■ ♪ My Favorite Things

57

酷寒のジャズ□1□2■	♪ Guess Who I Saw Today	67
来た飲んだ食べた■	♪ Struttin' With Some Barbecue	81
あれやこれや■	♪ All That Jazz	88
レクイエム■	♪ After You've Gone	99
内輪の話■	♪ Thing Ain't What They Used To Be	114
転載ぶろく■	♪ It's Easy To Remember	124
あとがき■	♪ Don't Explain	137
ここだけの話■	♪ Speak Low	141

失敗を恐れるな。

失敗なんてないんだ。

マイルス・デイヴィス

は
じ
め
に

♪ I Can't Get Started

映画「言い出しかねて」の中でボブ・ホープが歌い、トランペッター、バニー・ベリガンの演奏でヒットし、Oピーターソンはじめ多くのジャズメンやシンガーがカバーしています。

この本、本当は去年の40周年記念で出す予定でした。でも改装工事やいろいろなリニューアル・イベントやらで忙しかった上、あまりに長い間の多くのことを、どんなふうに筋道立てて書いたらいいか考えると億劫で…いつしか年を越し最近まで「書き出しかねて」いて1年も遅れてしまいました。

■はじめに

昨年2014年8月8日、ウチが（以後、私のお店、南青山ジャズクラブ、ボディ&ソウルをこう言わせてもらいます）新宿の百人町で産声を上げてからちょうど40年、今年41周年目に入りました。

日本全国に大小含めてライブ演奏するお店のオーナーは今、かなり多いと思います（最近時々ライブをやるお店も出てきて、何らかのカタチでジャズのライブ演奏が聴けるお店は都内だけで200店以上もあるそうです）。でも40年間、ほぼ毎晩お店に出て、お客さまと一緒に本格的なライブ演奏を聴いてきたオーナーは少ないんじゃないかしら。考えてみると40年間、定休日の日曜日（最近は定休日もなし）と正月休み、プライベートでお店を休む何日かを合わせて、お店を「欠勤」するのは年にせいぜい30日。つまり年間330〜40日ほど、私は毎日毎晩ジャズを聴いてきたことになります。

オーナーなんだから、そうそう連日連夜ステージに付き合わなくても……とこれまで多くの方に何度も言われました。でも他人任せにできない性分なんです。生まれつきの貧乏性。もちろん三度の飯よりジャズが好き、ということもありますけど。この歳になつても今だに毎晩、お店に出ています。

そんな40年間。5年ごとの周年記念にはいろんなイベントをやり、マーク入りのTシャツやらペンやら…さまざまな記念品を作ってきました。昨年の40周年、南青山に越してきてからも25年、大きな節目です。老朽化した店内の改装はともかく、お客さまにどんな記念品を贈ろうかしら…（小曽根真 3Days）はその一環のイベントでした）

そうだ、これまでの40年を振り返って「読み物」にしてみようかしら、と。あつという間の40年。でも、いろんなことが詰まった40年。内外の多くのミュージシャンや多くのお客さまと関わってきた40年。いろんな人と出会い、いろんな別れのあった40年。記憶に残るエピソードを私の歩みとともに綴ってみます。

でも書籍にする以上は、若いこれからのジャズファンに、日本のジャズの歴史の（なんて大げさですが）ほんの一端ですが残しておきたい。これも長年ジャズの「現場」にいた私の仕事かもしれない、とも思いはじめました。私をよく知らない方、特にジャズ好きの方には楽しんで読んで欲しい。そんなことを心がけて、日頃思っていることも含めて書いてみます。お楽しみいただけると思います。

前説が長いのは嫌われますね。この本をお読みいただく上で、いろいろお断りしておかねばならないことがあります。それは「あとがき」で言い訳することにして、ではさっそく始めてみます。

店名と社歌

♪ Body And Soul

「身も心も」ジャズとともに生きた私の半生ですが、この店名が今これほどしっくりくるとは、このお店をはじめた当時三十代そこそこの私は考えもしませんでした。第一、こんなに長い間お店が続くなんて思ってもみなかったですから。この曲には何度涙がこぼれたでしょう…改めて、素敵なバラードです。

ちなみに、元々この曲にはバース（前振りの詞）が付くようです。ほとんどのシンガーに歌われている曲ですが、実は私はまだバースを聴いたことがありません。

■店名と社歌

ペコちゃん（伊藤君子）に言わせると、この曲♪Body And Soulはウチのお店の「社歌」だそうです。なるほど、ですね。

多分どなたも、京子ママはこの曲が一番好きで、それで店名にしたんだろうな…と思っ
ていらつしやると思います。でも実は、ウチのお店が「ボディ&ソウル」であるのは、私
が一番好きな曲だからという理由ではないんです。まず、店名がこうなった経緯^{いきざつ}などお話
してみようかしら。これは初めてお話しするするいわば「秘話」ですので、どなたもご存
じありません。

40年前、新宿百人町にお店を持つことになった時。その時は本格的なライブ演奏をする
お店をやるつもりはなく、レコードをかけてお酒を飲むジャズバーを気楽にやるつもりで
した。その頃主流だった「ジャズ喫茶」の、いわば夜のお酒版ですね。その頃はまだ、コ
ンサート以外で本格的にライブ演奏を楽しむ、という文化は日本にはありませんでしたし。

当時、ライブハウスのハシリ、「タロー」をやっていた私が、アルバイトで店長を任され
ていたジャズ喫茶（夜はお酒を出すジャズバー）がありました。「タロー」とは目と鼻の先、
行ったり来たりのかかけ持ちです。そのお店のカウンターでその常連さんだったある方に

相談しました。こんど新しくお店をやることになって、いま工事してるんだけど、どんな店名にしたらいいかしら……まあ相談というより、軽い気持ちでお酒の話題にと言ったほうがいいかもしれません。

まず彼が言いました。「一番好きな曲を店名にしたら？」もつともですよね。「でもねえ……長いわよ」と私。カラオケはまだない時代ですけど、当時から私が好きで何かの折にマイクを持たされて歌っていた歌は、Gガーシュウインの♪The Man I Love（私の彼氏）♪Someday he'll come along…でした。もちろん今でも大好きで、何年かに一度お店が終った後、何かの折に歌わされることがあります。とてもとても人さまに聴かせられる歌では本当にありませんけど。

その彼が言うには「ザ・マン・アイ・ラブ」なんて店名、トルコじゃあるまいし（ソープとか風俗とかの言葉はまだありませんでした）第一長すぎるよ。でもまあ何でもいいけど、とにかくシラブル（syllable ≡ 音節）が複数あるのってカッコいいよねえ」。

当時「ビレッジ・バンガード」とか「カフェ・ボヘミア」とか「ゴールデン・サークル」とか「ファイブ・スポット」とか、日本でも「ピット・イン」とか……数え上げればキリないですけど、店名として2シラブルの「語感」がいかにカッコよく思えたのでしょうか。

「いっそのこと、もうひとつガンバって3シラブルにしたら？ 言いにくいから、かえって

覚えてもらえるんじゃない?」「じゃあ一番じゃないけど、私の好きな曲はね…」というわけ、ボディ・アンド・ソウルという3シラブルの店名に決まったわけです。よく考えもせず軽い気持ちでその場で即決。さすがに長いようで今は皆さん短く「ボディ」と言いませうけどね。(早口話♪ Day By Day でも♪ Night And Day でもよかったわけ)。

で、続けて彼が「名前のことより、何かいいマークがほしいねえ」と言いました。ちょうどその頃、ジャズ興行界で絶大な力を持っていたジャズの伝説的音楽プロデューサー、故ノーマン・グランツが出したパブロ・レコードというレーベルが話題になっていた時期でした。

モノクロ写真で統一されたそのジャケット群には、必ずカッコいいマークが描かれていました。パブロ・ピカソの描いた、いかにも彼の作らしい変わったレーベルマークでした。いま時々お客さまに聞かれます。ボディ&ソウルのあの顔のマークってユニークでいいね、誰か有名な人が描いたんですか? なんて。ま、ちょっとピカソっぽいと言えなくもないです。

実は、その店名の話をした当時は離婚直前で、ひとりで育てていた私の息子がたまたまその場に居合わせていました。その時の息子は今の私の孫より少し小さかったかしら。その息子に彼が言いました。「このコースターの裏に人間の横顔を描いてごらん」…そうです、

今のマークの原型の出来上がりでした。その絵の細い線を太くなざると、小学生の描いたその稚拙さがどこかピカソめいた雰囲気になったのです。

これが40年間ずっと店名に寄り添って、今も入り口のドアやステージの正面にあるあの顔マークなんです。このマークも、これほどじっくりきて皆さんに馴染んでお店のトレードマークになるなんて、その時は思いもしませんでした。余談ですが先日あるパーティーで和田誠さん（イラストレーター）にお会いして「ずっと以前に時々いらしてくれてたんですけど、憶えていらっしやいますか」と名刺を差し出すと「ああ、このマークね、行きましたねえ。憶えてますよ」と。

ついでに。気づいていない方もいらっしやいますが、店名はBODY&SOULと大文字で綴ります。ブログなどを書く時は曲名の『Body And Soul』とは区別しています。法務局に届け出ている店名は「株式会社ボディアンドソール」。ソールなんてちよつとダサイでしょ。

実は法人として届け出る際、当時のウチの税理士さんが日本語でこう書いて届出書類を作ってしまったからなんです。最近では英文字でも登録できるようですが、当時は日本語オンリーでした。気づいたのは株式会社の認可が下りてから。でも法人名を変えるのは費用もかかるし手続きがメンドイので、まっいいかッ…と、そのまま来てしまっています。だから銀行や正式な書類などの店名は「ボディアンドソール」なのです。

ピアノスト小曾根真さんが出演されると（小曾根さんは私が本当に尊敬するミュージシャンです。後ほど別に書きますが）立ち見で超満員になった店内で、アンコールアンコールまたアンコール。なかなかステージを終えることができません。そんな時、彼が冗談めいて言います。「さあこの曲を出すからには、もうアンコールはできないだろう」それでようやく終演にすることができののです。スペシャル企画などで来日して出演するミュージシャンたちも、大抵この曲で終演の区切りをつけます。まぎれもなく「社歌」なのです。アルフィー、サテンドール、昔六本木にあつて剛ちゃん（山本剛）がハウスピアノストをやっていたミスティー…など、曲名を店名にしたお店は珍しくありません。このような「社歌」を持つているお店は何かと都合に違いありません。反面ウチのお店で♪Alleeや♪Satin Dollが演奏され歌われることはめったにありません。（♪Mistyは今、剛ちゃんの十八番おはしになっていますが）思うに出演者もウチのお店に遠慮して、よそのお店の「社歌」をステージにかけるのを少しはばかっているのかもしれませんが（そんなこと気にせず演やつてくれればいいのに…）

逆に、ウチの「社歌」であるこの♪Body And Soulがよそで歌われることも少ないかもしれません。もっともこの歌はシンガーにとつては結構難しい歌で、レパートリーにできるシンガーもそう多くないと思いますが。これまで40年間、何かにつけ演奏されて、もう

何百回とさまざまなアレンジで聴いてきました。この曲が演奏されたり歌われたりする時には「私に」という特別な思いを感じます。心が込められた演奏は、アレンジや演奏の善し悪しを超えて心に染み入ります。

7 追記

この際ですから、ウチが誕生した今から41年前（1974年）の出来事をちよつと振り返ってみましょうか。年配の方には懐かしい思い出ですが、若い方にはもう教科書の中の「近代史」の一部でしょうね。

前年ベトナム戦争が終りトイレットペーパー騒動、3月小野田少尉フィリピン・ルバング島から帰還、5月セブンイレブンが江東区に第1号店を出店、7月北の湖が史上最年少で第55代横綱昇進。

8月8日、ウチが誕生した当日にウォーターゲート事件でニクソン米大統領が辞任、8月末に「ベルサイユのばら」が宝塚で初演され、その翌日に過激派による三菱重工爆破事件で死者が出て（今ならテロと言うんでしょうか）大騒ぎでした。そして一番有名なのが…この秋、あの「不滅の」名言を残して長嶋選手が引退されました。

そうこうするうちに

♪ As Time Goes By

「時の過ぎゆくままに」あれもこれも成り行きに任せた結果、今のお店があります。引っ越しも改装も、私はその都度いろんな方にほとんど全てをお任せしてもっばら傍で「見てた」だけ。

ある人に言わせると私は典型的な「天然」だそうです（最近天然に少し認知症が入ってきて始末に悪い、と。）でも関係者は、皆さんジャズが大好き。その意味では、ジャズに助けられた半生なのです。

■そうこうするうちに

40年前新宿百人町で生まれ、六本木で育ち、北青山を経て今、こうして南青山の地に存あるこのお店。でも、これまでウチのお店に関して、さあ新しいことに挑戦するぞ、という私自身の決意で意気込んで移転したり何かを始めたことは一度もないんです。どんな経緯いきさつで今こんなカタチで南青山の地に存するのか、その概要あらましをザッとお話しておこうかしら。

考えてみると、いろんな状況に流されてきた、としか表現しようがないほど、つまり成り行き任せの40年なんです。私としてはただただジャズが好き、いいジャズが聴きたい、というだけでお気楽にやってきたのです。ある人に言わせると「キミのは単なる、偉大なるマンネリだよ」と揶揄やゆされます。

そもそのボデイ&ソウルのはじまり。新宿百人町のお店は、ある建築施工屋さんが（それほど親しい方ではなく、建築資材が余あまっていたのかもしれない）空いてたビルの地下一室を内装してあげるから、内装費は儲かったら返してくれればいいよ、と全てを任されてはじめたものなんです。

ライブハウス「タロー」を始めてから5、6年経っていました。一緒にタローをはじめた前の夫との間に息子が出来、でも食べていけなくて別居と離婚を考えていた時でした。

ジャズのレコードをかけてお酒を出して、ひとりで気楽にやろうかしら、と深く考えもせずその話に乗ったのでした。「タロー」を始めたきっかけは「若気の至りの章」で触れます。だから、どんな色のどんな作りのお店になるのか、ほとんど私に相談なしに出来上がったお店（と言って不満があったわけではありません）。お客さまはジャズ好きの学生さんや若い方が多かったですね。今のようにな年季の入ったジャズファンはほとんどいませんでした。当時学生だった方は皆さん還暦を過ぎていますが、今だに通ってきてくれる方が何人もいらつしやいます。

3年ほどした頃でした。ひとりで育てていた私の息子（全寮制の小学校でした）の同級生に、たまたまジャーマン・ベーカリーという有名なパン屋さんのオーナーがいらして、六本木交差点近くの持ちビルに一堂、スケルトン状態で空いてる部屋があるけど、そこでやってみませんか、と勧められました。ここ百人町は新宿からちよつと外れて駅から遠いし：六本木の駅の傍（そば）もいいわねえ。おしゃれな六本木でやるんなら、ピアノくらい置きたいワ：その話に乗りました。

でも私には先立つモノがありません。そんな私に新装開店資金を用立ててくれたのは、T銀行の六本木支店長さんでした。面識もなく飛び込みで入った私の話を聞いて、担保もとらず彼の責任と英断で資金を貸してくれたのです。当時、実績はもちろん口座さえない

水商売の若い女に、まとまったお金を、しかもまだ若い支店長の責任で貸すのはかなり大変なことだったようです。でも秀でた人は違います。彼はその後若くして本部の取締役にまで大出世して、大阪本部に転勤になりました。今はご高齢でリタイアされて関西にお住まいですが、上京するとお店に顔を出して今だにいろいろ心配してくださいます。（後で知ることになった偶然ですが、その店長さんは、店名を決める時に相談したある人の田舎の高校の先輩でした。世間で意外に狭いものなんですよね）。

六本木に引越してきた当初は、ライブハウスというより「ピアノ・バー」でした。階下にパン屋さんジャーマン・ベーカリーのある小さなビル、いわゆるペンシルビルの3階。狭い階段を上がってドアを開けると、奥行きばかりが長い小さな空間。ピアノだって、壁の裏に隠れることになった窓から搬入したくらい。（窓をつぶして壁にしたのです）。

細長い部屋の奥にピアノを置き、ピアノを囲んで周りにカウンターをこしらえました。お酒を飲みながら目の前の弾き語りを聴く…当時は新しくとてもオシャレな業態でした。その当初、弾き語りをお願いしていたのが立花保子さん。その後ボーカル教室をはじめられて、今もご健在でウチにも時々いらしてくださいます。

そのうちに、私がかつて「タロー」でライブをやっていたこともあって、私を知る多くのミュージシャンが夜なくやって来るようになり、ピアノを弾いたり楽器を吹いたり…

するとピアノだけでは物足りなくなつて、ベースアンプを置くようになり、ドラムセットを置くようになり、夜が更けるとジャムが始まり…弾き語りのお店がライブ演奏のお店になるのに、そう月日^{つきひ}はかかりませんでした。

そのうちに、6〜7年経った頃でしたか、ある常連の建築家のお客さまが、いつそのこと本格的なライブハウスにしたら…と、設計から何から何まで音頭を取ってくれて店内を全面改装したわけです。（その方も今はリタイアされていますがご健在で、時々お店にやってきてくださいます）。

そのうちに、改装して5〜6年ほどした頃、お店がいわゆる地上げの対象になりました。バブルが弾ける直前ですね。借家でしたが、地上げ屋さんが代替の営業地を探してきてくれたのが北青山。当時あつた紀ノ国屋フード店（今は立派なビルになっています）の脇の細い路地を、30〜40mほど青山通りから入ったところでした。

そのうちに（…って、ホラね、成り行き任せでしょ、いつも、そうこうするうちに、またそうこうするうちに、なんですもの）昭和が平成に変わり、北青山に引っ越してまだ2年も経たないうちでした。今度は別のある建築屋さんが、もっと広くていいところがあるから、と勧めてくれてまた引っ越すことになりました。北青山のお店は地上げ屋さんが見つけてきた場所に急いで引っ越したせいで、立地は良かったのですが何しろ狭かったのです。

音も予想以上にこもってしまつて気にいりません。で、内装の設計から施工まで、全てその建築屋さんにお任せして出来上がったのが25年前、今の南青山のお店なのです。（北青山のボディ&ソウルは、ソウル「魂」という名前の居酒屋にして、改装や経営までその建築屋さんにお任せ。「魂」はその後17〜8年続いていましたが今はもうありません）

考えてみると、あれもこれも成り行きに任せた結果、今のお店があります。引越しも改装も、私はその都度いろんな方に全てをお任せしてもっぱら傍^{はた}で「見てた」だけ。でも関係者は、皆さんジャズが大好き。その意味では、ジャズに助けられて今のお店が存在している、と言えるかもしれません。

どさくさにまぎれて

♪ Moanin'

アート・ブレイキー&ジャズ・メッセンジャーズの代表曲。
ブレイキーさんに連れてこられてウチに来るようになったNYの
ミュージシャンも多いと思います。多くのミュージシャンが、来
日するとウチに立ち寄るようになったきっかけ、ロイ・ヘインズ
さんと、ブレイキーさんがウチを特にご最^{ひい}屑にしてくださるよう
になったエピソードです。

その朝、彼も二日酔いがひどいようで、「うめく」ような感じ
の起き抜け直後の様子でした。

■どさくさにまぎれて

つい先日、ロイ・ヘインズさんのブルーノート東京での来日公演があり、何年かぶりにお会いすることができました。90歳を迎えられた彼はすっかり痩せてしまわれましたけど、私を見るとあの大きな目を輝かせて大変喜んですぐにハグしてくれました。さすがに動きは老人のものでしたが、一旦ドラムの前に座るとカクシヤクとして、ツボを心得たところで気持よくバシツと入るシンバルが大喝采を受けていて、私は嬉しくなりました。私とお会いしてお話しているあいだ中、ナッツを口に運んでいましたからきつとナッツは身体にいいのかもしれないね。

日本に行ったらボディ&ソウルという店に行ってみろ、ということになった最初のミュージシャンがロイ・ヘインズさんでした。ウチが新宿百人町で産声を上げる少し前のこと。新宿厚生年金ホールで、NYで活躍中のドラマーが来て「ドラム合戦」というコンサートが行われたことがありました。その時ライブハウス「タロー」をやった私が、頼まれてステージで花束を渡す役を務めました。

当時ロイさんのドラムは、小さくさんのタムタムを並べる独特のセットでカッコよかった。その楽屋でお会いし素晴らしいドラミングだと褒めると、翌日、滞在中のホテル

のカフェに誘われました。今思えば、若い私を口説くつもりでデートだったかもしれませんが。でも私は「追っかけ」ではなく純粋なジャズファン、そのテのことには全く興味がなかった。とを彼もすぐに了解したのでしよう。その時はお茶を飲んでお話しただけでした。

2、3年経って、日本で最初のジャズ・フェスティバル、ライブ・アンダー・ザ・スカイが炎天下、調布の田園コロシアム（今はもうありません）で行われた時、ロイさんから招待状が来ました。そのコンサートを終えた後、開店から間もない百人町のお店に連れてきて夜遅くまでお客さまと一緒に楽しく飲んだのです。そんなことが始まりで、彼はその後六本木のお店にも来日すると必ずやってくるようになったのです。

私がこんなお婆さんになったいま、90歳になったロイさんとお会いしている。そうして彼のお孫さん（マーカス・ギルモア（D.S.）さん）も今NYで活躍し、時々ウチに来日出演する。その頃は夢にも思いませんでした。

ロイ・ヘインズさん以来、ウチのお店にはホントに多くの来日ミュージシャンが立ち寄ってくださいます。今はブルーノート東京が近くなので、出演者は終演後には歩いて遊びにきてくださいますが、六本木にあった頃はまだブルーノート東京がなくて（そもそもNYにブルーノートができたのは80年代はじめ。東京にできたのはもっとずっと後）ほとんどは大きなコンサートのための来日公演でした。

故アート・ブレイキーさんのエピソードもそんな中のひとつ。これもまだ話したことがない秘話ですけど、すでに時効も成立しています。

当時、広告代理店に勤めてディレクターをやっていたある人が、ある広告主の雑誌の見開き広告をプレゼンテーションしたことがありました。キャンペーンとしてではなく単発の、つまり何誌かですが一回限りの広告です。代理店3〜4社の競合コンペだったそうですが、当時『富士ジャズ・フェス』が夏の恒例行事になりつつあった時期、そこにアート・ブレイキーのドラミング姿をヴィジュアルにした一案を紛れ込ませたんだそうです。

まあお金もかかるし、この案は決まることもないだろう、と「枯れ木も山の賑わい」として提出したんだそうです。広告代理店の競合コンペにはよくあることなんだそうです。ところが広告依頼主がこれをいたく気に入って、すんなり決まってしまいました。ブレイキーさんご本人にも関係事務所にも了解もなく、勝手に作って提出してしまったものです。さあ困った。私に何とかならないかと相談がありました。

そこで私が一計を講じました。その頃ブレイキーさんは、来日コンサートなどで来日すると時々ウチに立ち寄ってくださっていました。じゃあ来月あたり秋のコンサートにきつと来るから、そしたらお酒をたくさん飲ませて、酔いつぶれたら契約書にサインさせてしまおう。何といい加減でしょう。

そうして彼が来日してウチにやってきて酔いつぶれた翌日、当時ウチによく出ていたシンガー鈴木道子さんと一緒に、ブレイキーさんの二日酔いがまだ醒めないうちにと朝早く、滞在中のホテルの一室を訪ねたのです。部屋に入るなり、眠そうな彼に広告原稿案を見せながら、確か50万円くらいだったかしら、現金を手渡しながら一枚の「掲載承諾契約書」とペンを差し出したのです。するとザッと目を通してあまり精読もせず、うんいい広告だ、O K O K、なんて言いながら気軽にサインしてくれたんです。大成功。

日本と違って米国では、いわゆる「タレント広告」はほとんどありません。役者やミュージシャンが企業の広告やテレビCMに出ることは稀なことです。ましてジャズ・ミュージシャンにとってはなおさらです。多分、その時の彼にとっては「えっ、こんなことでお小遣いこんなにもらつていいの？」そんな感じでしょうか。でも日本では「えっ、あの有名な人がこんな安いお金で出てくれるの？」実際、広告依頼主の担当者も驚かれたということです。

単発とはいえ数誌の雑誌広告。しかもそこそこ名のある広告主です。今ならfacebookかなにかで話題にされ、すぐ関係者の目にとまってやっかいな事になったかもしれません。便利でいい時代になったのか、暮らしにくい時代になったのか…。

ブレイキーさんはそのことがよほど嬉しかったのか、それまでは気が向くと時々ウチに

やってくる感じでしたが、そんなことがあつて以来、日本に来ると必ず共演したミュージシャンを連れて来るようになりました。

「アート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズ」は度々メンバーが交代し、このバンドの一員だったミュージシャンが、その後キラ星のごとく活躍されて、人材育成学校だったと言われるほどです。その意味では超名門校ですね。その校長先生がブレイキーさんでしょうか。親分肌で、ウチにいらつしやる時には必ず一緒に来日共演した「生徒さんたち」を大勢引き連れてやってきました。そうして「若い生徒たち」に演奏させ、それを聴いて楽しんでいらした、まさに校長先生でした。

鈴木道子さんは、当時はよくウチで歌われていましたが、今は幸せなご結婚をされてハーフリタイア。でも太い声質といいグルーブ感といい、日本に数少ない本物のジャズ・シンガーだと私は思っています。今、年に1〜2度、私も聴きたくなって出演をお願いしています。彼女はお酒は飲めませんでした。私と同じく踊りが好きで、当時はお店が終わってからよく一緒に踊りに行ったりしましたつけ。

若 気 の 至 り

♪ Blame It On My Youth

G. ガーシュウィンに曲を提供したピアニスト、オスカー・レヴァントの作品。「若気の至り」というのは名訳だと思います。私も若かったせいで、お店が六本木にあった頃が一番いろんなことがあった気がします。

ウチでも時々歌われます。還暦過ぎたら聴くといい、とも言われています。

■若気の至り その1

アート・ブレイキーさんと並んで、ウチのお店で古くからお付き合いのある方がエディ・ゴメスさんです。エディさんは「ボディ&ソウルファミリー」の今はいわば家長でしょうか。「ボディ&ソウル・ファミリー」という言葉を最初に使い始めたのもエディさんです。

エディさんと知り合うことになった最初は、音楽プロデューサーの伊藤潔さんが企画された「グレート・ジャズ・トリオ」の来日公演とレコーディングでした。トリオのメンバーは、ハンク・ジョーンズ(☺)さん、エディ・ゴメス(☺)さん、ジミー・コブ(☺)さんです。

私がレコーディング・スタジオに遊びに行くと、録音ブースに入って演奏中だったハンクさんが、私の顔を見るなり突然それまで弾いていた手を止めて『Body And Soul』を弾きはじめました。私のことを歓迎してくださったのです。それから一週間ほど滞在中は、毎夜三人でお店にやってきて演奏して遊んでいかれました。この三人からでしょうか、どちらから言うでもなく「ボディ&ソウル・ファミリー」と自他共に使うようになったのは。

あれからもう35年近くになるでしょうか。一番のご高齢だったハンクさんはお亡くなりになって今年で5年になります。来日してリハールなどのための録音スタジオに遊びに行くときと、私の顔を見るなりニコツとして手を止めて『Body And Soul』を弾いて

くださいました。一番最初の時のように。亡くなる前の年の大晦日にもちようど来日中で、やってきてご高齢を押して1曲弾いてくださいました。

エディさんは、私がNYに遊びに行った時ご自宅にまでご招待してくださった、とても人情に厚い方です。マンハッタンの素敵なアパート。奥様と「プッチーニ」という愛犬と住んでいらして、その夜いろんなところに連れて行ってくれました。911で崩壊したツインタワービルの最上階スカイレストランで、夜景を見下ろしながら食事したマンハッタンの美しい夜景が目には焼き付いています。

夜景を見た後、飲みに行こうと連れて行ってくれたのが、マンハッタンの外れの：エツ？教会？怖そうなガードマンが入り口に2、3人。使われなくなった古びた教会で、メンバーかセレブでないと入れない秘密クラブめいたところでした。もちろん一見さんや観光客などは入れませんがエディさんの「顔」で入れたのです。

中に入るとミラーボールの下、大勢の着飾った男女が薄暗い大音響の中で踊っていました。そうですね「ジュリアナ」を少し小さくして高級に大人にした感じででしょうか。ところが私が踊り始めると周りの皆さんが周囲を空けて私の踊りが俄然注目されはじめました。踊りながら、なかしら：とエディさんに聞くと、何でも私のことをオノ・ヨーコだと思った人がいたようで。あゝそれでガードマンのエスコートぶりも仰々しかったんだわ。

私は少しアゴ（エラ）が張ってて（私自身は気に入らないんですけど）首が細くて、外国人にはモテるタイプの顔なんだそうです。

六本木のお店を改装したのはその年の夏でした。本格的なライブハウスに改装した記念に何か大きなイベントをやりたい、とエディさんにご相談して実現したのが、エディ・ゴメスさんとステイブ・ガッドさん、そこに日本のピアニストが日替わりで参加（最終日には故マイケル・ブレッカー（5）さんも参加）した1週間のトリオ演奏でした。エディさんとガッドさんはウチが招請した最初のミュージシャンでもあります。それから何かと私は彼に相談し、その後の周年イベントでも何度か来ていただき、今もボディ&ソウルファミリーの長老として見守っていてくれます。

踊りのことだと思い出した武勇伝（？）をひとつ。

マービン・ゲイが日本武道館で公演した時のこと（確か70年代が終わる頃）。そろそろ始まる時間かな、と私が観客としてひとり席に座っていると、係の人が私のところに来て、ちよつと用事があるので一緒に来てくれ、と楽屋に連れていかれました。若い女性が10人ほどもいました。どうやら皆さん同じように客席から連れて来られた観客のようでした。

全員が丸く円を描くように並ばされ、中央の方がグルッと見回してから、私だけ残ってくれ、と言われました。他の人はご用済みだから帰っていいと。しばらく待っていると、

なんの説明もないまま舞台の袖に連れていかれました。もうステージは始まっていた。するとマービンさんが舞台から、袖で見ていた私を手招きで呼んだのです。えっ…呼ばれるまま出て行くと、もう武道館の大観衆の前です。何やら音楽が始まり、マービンさんがステップを踏みながら私を誘います。私もやつと意味がわかって、彼のステップに合わせて適当に踊ったのです。大観衆から大拍手・大喝采を浴びて…。それがオープニングでした。

マービンさんが真っ白いタキシード姿で、私は全身が黒のパンタロンスーツ姿。髪の毛の手入れが面倒だったので、ツバの広い黒い帽子をかぶって全身黒づくめ。客席で目立っていたのかもしれませんが。多分それで選ばれたんだと思います。だって集められた時には、ダンスのオーディションはなかったですから。でも私が踊りが得意で、恥をかかないで良かったワ。

その時は気づかなかったのですが、故本田竹広さんや峰厚介さん村上寛さんら、当時日本で人気絶頂だったフュージョンバンド「ネイティブ・サン」のメンバーの方たちが揃って客席のどこかで見ていたらしいのです。皆さん六本木のウチのお店に時々出演されていたミュージシャンたちで、その後しばらくはウチに出演するたびに「Kyokoさん、やたらセクシーでカッコよかったぜ」と随分冷やかされました。

■若気の至り その2

ちなみに私の高校は松竹芸能学校、SKD予備軍です。東銀座万年橋の角の東劇ビル（今は新しいビルになっています）に毎日通って授業といえは踊りの練習ばかり。クラシックバレエが基本で、日本舞踊からモダンダンス、タンゴ、ジルバ、ルンバといった社交ダンス：（だから私は一応そこそこに踊れます）。卒業後は、SKDとして時々浅草国際劇場（松竹の小屋）で行われる当時の大スター、美空ひばり、松尾和子、マヒナスターズ：のレビューのバックで踊っていました。でも「女の園」の湿った女々しい雰囲気が大嫌いで、そのうち帰りに新宿のジャズ喫茶に通う「不良少女」になりました。

当時はジャズを聴く、というだけで不良と思われたジャズは不良の音楽。ジャズは退廃的な音楽と言われ、世間の目を気にしながら聴く時代だったのです。ことのついでに、私がジャズにのめり込んだ経緯（いきさつ）をお話ししてみます。ちゃんと話すのもこれが初めて。私の生い立ちなど興味ないと思いますが、若い方たちに、日本にはこんな時代もあったことを知っておいてほしいし。

戦争が終わって戦地から父が帰ってきたのは私が小学校4年の時。同時に私も疎開先の新潟から帰ってきました。（玉音放送もよく覚えています）。職場に復帰した父は、大昔の

内外通信（後の博報堂）という広告代理店で録音技師をやっていました。当時は、広告代理店がラジオ番組なんかも制作していたんですね。時々、落語の録音現場（寄席）やスタジオに連れていってもらったことを覚えています。

一方、母は生田流の箏曲の名取りで、家にはお弟子さんが大勢出入りして、いつも琴や三味線の音が家に流れていました。毎年お正月番組に出てお琴を弾いていた母の姿を家族で見たり、お向かいさんが茶道のお師匠さんで、「初釜」のお茶会に出させられてもいた、そんなお正月を過ごす日本的な家庭でした。

よく、基本的な性格や好みは幼いころに作られると言われます。環境かDNAかなんてことも問題にされますが、少なくとも私のジャズ好きはDNAではないようです。でも父の仕事の関係か、聞いていた米軍の進駐軍放送（FEN）から流れるジャズや、レコードでジャズを聴き始めたのはその頃ですから、環境のせいが少しあるかもしれません。私は今年1月に亡くなった兄と、妹がいますが、ジャズにのめり込んだのは私だけ。でも最初にジャズ喫茶に連れて行ってくれたのは、まだ学生だった兄です。

その頃は、モダンジャズの好きな若者が、ライブ演奏を気軽に聴けるお店はありませんでした。高いキャバレーやクラブに週末だけライブ演奏のバンドが入るくらい。モダンジャズのライブ演奏を身近に聴けるお店が欲しいね、と皆んなが思っている世の中でした。

そんな時に、ジャズ好きの方が歌舞伎町の一角に空いていた喫茶店スペースを紹介してくれたのです。で、SKDに行かなくなつた娘のために、父が資金などを援助してくれて、ジャズ喫茶仲間だった男性と一緒に始めたのが「タロー」です。その彼といつしか夫婦の関係になつて、親の反対を押し切つて結婚。やがて子供が生まれました。その後しばらくして別居・離婚したのですが…世間知らずだった私の最初の若気の至りかもしれません。

レコードがLPになりたての頃で、父が仕事の関係でどこかで入手してきた「舶来物」のスピーカーがJBL（当時はジムランと言つてました）。ジャズを聴くのに最高の音質、とジャズファン垂涎すいえんのスピーカーで、昼間はレコードをかけ、夜になると学生やジャズミュージシャンのタマゴたちが演奏したのです。（「転載ふろく」の章のコラムに登場）

小学校く中学時代に聞いていたレコードはSPの時代。LPになったのはもう少し後からです。と言つてもCD世代の若い方はLPもほとんどご存じないでしょうね。輸入版LPの値段は今のCDと同じくらいでしたが、当時、大卒の初任給が2万5千円くらいでしたから相当高価なものでした。洋画が普通に見られるようになった頃で、グレンミラー物語やベニーグッドマン物語…そしてミュージカルにも夢中になりました。それで歌や踊りが大好きになり、中学を出ると松竹に入学したのです。その頃は40数倍の狭き門でした。

「不良の音楽」だった時代は変わり、今は好きなときに好きなだけ素晴らしいジャズが聴

けるようになりましたが、私にとっては今も、あの頃新しい時代とともにアメリカからやってきた、胸をときめかせて聴いた音楽なのです。それが高じて70年後の今も毎日ジャズを聴いているというわけです。私が「不良少女」としてよく聴いていたのは、リー・コニッツの輸入版LP「MOTION」。入り浸っていた新宿のジャズ喫茶で、よくリクエストしていたことを思い出します。お茶代は80円だったかしら…。

ちなみに「MOTION」の編成はピアノ・レスのワンホーン・トリオ。Sロリィズではお馴染みの編成でサクソスが軽やかにスウィングします。♪ I Remember You / All of Me / Foolin' Myself / You'd Be So Nice To Come Home To / I'll Remember April とこうスタンダード曲ばかり入っていますが、アドリブで始まりそのまま終わってしまうような、あまり主旋律が追えない、いかにもモダンジャズらしい演奏です。

今でもSKDの同期会があります。呼ばれるので時々出席します。倍賞千恵子さんもちょうどつしゃいますが、皆さん狭き門をくぐった美形だったせいかしら、いい方と結婚されていて、お医者様夫人、弁護士夫人、社長夫人…いわゆる上流の優雅な暮らしをされている上品な方がほとんどです。今だに毎日お店に出て「貧乏ヒマなし」暮らしをしているのは私くらいでしょうか。ジャズに出会って「不良少女」にならなければ、今頃は富豪の奥様に納まっていたのかも…

■若氣の至り その3

「不良少女」で思い出したわけではありませんが、ヤクザ屋さんと渡り合ったことがあります。私が若かった六本木時代のこと。

当時の六本木、お店の近くにTSKKCCという大きなビルがありました。高級会員制のクラブやサウナが入っていました。実際はT会というヤクザ組織の拠点だったことは周知の事実でした。新宿から引越して来てすぐの頃、多分その組織の下の方の人だと思えますがお店にやって来て、女手ひとつで夜のお店をやるのはいろいろ大変だろう…とかなんとか…。早い話が「メカジメ料」と言うんですか、いわゆるシヨバ代、用心棒代を払えと言うんです。それほど大した額ではないんですけどね。

私はそういう理不尽なことが大嫌いで、最初はむげもなく断りました。すると今度は、多分幹部でしょう、子分衆を何人か連れてやって来ました。冗談ではありません、こんな連中にお店に出入りされたらたまりません。私は入り口に立ちはだかったのです。「単なる客だ入れろ」「いや入れない」と押し問答。向こうも次第に口調が荒々しくなり「こんな店つぶすのはわけ無いぞ」と子分衆が私を囲んで脅しがはじまりました。それで私は女だてらに啖呵^{たんか}を切ったんです。

「やれるもんならやってみなさい、女だと思って馬鹿にするな、私は普通の女とは違う、相手になるからそれなりの覚悟をしてらっしゃい！」……というようなことだったかしら。お店に居合わせたお客さまもびっくりして怖がったくらい威勢のいい啖呵でした。私はまだ30代の女ざかり、恐れ知らずの若気の至りで赤面モノですけど。すると親分らしい人が、いやー氣に入った、こんな女は初めてだ、と逆に好かれてしまったんです。もちろん「メカジメ料」はそれつきり取りに来ませんでした。

その時のことが伝わったのかどうか……その後しばらくしてある別の親分さんがやって来ました。差し出された名刺には金で刷られた組のマークと、勘亭流風の筆文字で組の名が大きく書いてありました。ジャズ好きの親分さんで、それから時々やって来てジャズを楽しんでいかれるようになりました。

ピシッと高そうなスーツを着てやって来ましたが、物腰や言葉使いはやはりヤクザ屋さんそのものです。彼が来た時は、私が側について離れずお世話するようにしました。長年にわたって時々やって来ましたが、何ヶ月とか何年とか来ない時があつてしばらくすると現れるのです。聞くと「いや、別荘にお勤めに行つて来れなかったんだ」ということでした（別荘って刑務所です）。お店が南青山に引っ越してきてからも、年に何度かやつてきました。でも最近何年も姿を見せなくなりましたから、別荘暮らしが長びいているのか、

あるいは、ご健在ではないのかもしれませんが。

ジャズを楽しむのに職業や資格がいるわけではありません。ヤクザ屋さんに限らず本当に多くの職業と分野のお客さまがいらつしやいます。皇族の方から、代議士、作家、ジャーナリスト、スポーツ選手、お相撲さん、タレントや歌手や俳優……ま、その話は別にすることにして、ここではその六本木のお店であった「他人の武勇伝」を追加。

その前に余談ですが、私はこれまでテレビを見ることはほとんどありませんでした。今もバラエティ番組やテレビドラマはじめ地上波を見たことはありません。だからJ-POPなどのヒット曲もほとんど知らないジャズバカです。

歌手やセレブにしても、昔の方はともかく今の方を私はほとんど知りません。EXILEだってちゃんと知ったのは、お店に来るようになったATSUSHIさんを知ってからです。「このあいだこんな人が来たわよ」と若い方に話すと「えーッ、凄い人なのよ」と驚かれます。ミュージシャンやタレントだってこんな具合ですから、スポーツ選手などはさらにひどいものです（って、エバることじゃないですけど）。どなたも平等なお客さま、ことさらチャホヤしません。でもそれがかえってセレブの方には来やすいお店になっているかもしれない。

つい先日、あるお客さまがスマホでテレビ画面を録った動画を見せてくださいました。「ドラマ見てたらほら、このシーン」その場面は確か1年ほど前にウチで収録されたもの。

「アラけっこう長い場面なのね、ところでこの役者って有名な人？」そんな感じ。南青山店になってからは特に、テレビドラマなどでジャズクラブのワンシーンでお店が登場するようになって、実際に放映された映像を見たのは初めてでした。（話が外れました）。

六本木当時のお店は、奥行きばかりが長い小さなペンシル・ビルの3階にありました。隣のビルとの間隔はほんの1層半ほどでしたでしょうか。ある夜、数人の黒人がやってきてジャズを楽しんでライブ演奏が終わると、その中の一人がトイレに入り他の人はサッと帰られました。きつとその人がみんなの料金を払うのだろうと思いました。

ところが、いい加減長いことトイレから出てきません。ノックしても返事がなく心配になって皆んなでドアをこじ開けてみると…もぬけの殻。まさかと思ったのですが、トイレの換気のための上部の小さな窓から抜け出て、隣のビルとの狭い空間を伝わって降り、飲み逃げしたのです。すぐ麻布署に連絡すると警官が来て、犯人は米軍の海兵隊員が何かで最近同様の被害が多いんだ、ということでした。伝わり降りるものが何もない壁だけの3階ですよ、敵ながらアツパレ、と思うほど曲芸的な離れ業でした。さすが海兵隊員！

飲み逃げされることは時々ありました。いつの間にかサツといなくなってしまうた別の黒人グループ。アタマにきた私はすぐお店を飛び出して、六本木の交差点まで追っかけました。そうして一人の腕を捕まえ、すぐ側にあった麻布署まで引っ張って行きました。今

思うと、若かったからできたんだと思います。でも当時の麻布署には英語の話せる署員が誰もいなくて、被害届けやら何やら事情聴取されるのは私ばかり。アタマにきて途中で帰ってきてしまいました。もちろん、料金は取りっぱぐれました。だって彼らはお金持っ
てなかったんですもの。

武勇伝のエピソードというわけではありませんが、事件で思い出しました。殺人未遂の容疑者として、いつとき世間を賑わした女性がウチのお店によくいらしていた常連さんだったことがあります。

会社の経理をやっていて使い込みがバレそうになり、不正を知られた相手に、ウチの階下の隣にあったマクドナルドで買ったコーヒーに毒を入れ、飲ませ、逮捕された女性。お昼のワイドショーの格好のネタです。顔写真がしょっちゅうテレビで流されましたから「エッあの人が」とお店ではしばらくその話で持ちきりでした。「あの人は今」……どうなっているのかしら。

いろいろな出会い

♪ Ebb Tide

「引き潮」。フランク・チャックスフィールド楽団の演奏で、誰もが一度は聴いたことがあるよく知られたメロディー。若きナンシー・ウィルソンさんの持ち歌でもあります。六本木店から南青山に移ってからもよくウチに遊びにいらしていたナンシーさん。彼女のことを思い出すと、いつもこの歌が頭に浮かびます。

ご高齢で、ここ何年かお会いしていません。今は、ゆっくりと潮が引くように、きっといい余生を送られていることでしょう。

■ いろんな出会い

ナンシー・ウィルソンさんが来日する度^{たび}にやって来るようになった最初の理由は、他のジャズメンとちよつと違います。

新宿から六本木に引越した時、カメラマンだった当時の常連さんが、壁が寂しいからと新聞紙2枚分くらいの大きな写真パネルを持ってきて、壁に飾ってくれたんです。その3枚の写真が全てナンシー・ウィルソン。小顔の黒人美人歌手として当時の人気者でした。どこから拝借した素材か知りませんが、全身やら顔のアップやら、プロの仕事ですからとてもいい表情の素敵なお写真パネル。小さなお店の何も飾りのない壁に、ナンシーさんの大きな写真だけがひととき目立っていました。

「東京に行ったらボディ&ソウルというお店に行ってみろ」誰かに聞いていたのでしょ。初めてやってきたナンシーさんは、その写真パネルの前に立つてとても嬉しそうにしばらく眺めていました。それがきつとお気に召したのだと思います。それ以来、来日すると必ずやってきて「今日は疲れているの」なんて座っていても、ペコちゃん（伊藤君子）やチャリートさんが歌っているのを聴くと歌いたくなるようで、必ず歌ってくださいました。

こんなこともありました。来日中にナンシーさんのお父様のご病状が悪化したとのこと

でやってきて「今夜は私には音楽が必要、みんなでパーティーをしましょう」ということになったのです。そして、涙を流しながら歌う彼女と、優しい目でバックをつけるミュージシャンたち…心温まる、とても印象に残る一夜でした。

故上野尊子さんが「♪ Getting To Know You (王様と私)」を歌っているのを聴いて「気に入った」。この曲は確かナンシーさんの昔のご自分のアルバムに入っていたのですが…忘れていたのかしら。次の来日ではしっかりプログラムの一曲になっていました。

♪ Ebb Tide (引き潮) という曲。たまたま若きチャリートさんが歌っているのを聴いて確か翌々日、私達が観に行った来日コンサートで歌われたのです。予定になかった曲だったようで、バックを付けずにアカペラでした。その後、ぜひ自分も歌いたいからテープがほしい、ということを送ったら、佐藤允彦(ゆんぺん)さんのアレンジでレコーディングしたということでした。彼女が、ある新聞のインタビュに答えて、私はジャズシンガーでもポップスシンガーでもない、私はソング・クリエイターだ、と言っていました、なるほどと思います。

これは出会えなかった「出会い」で印象深いのですが(記憶が断片的に出てきます)故カーメン・マクレエさんとはお会いできなかった六本木店時代の話。来るという連絡をいただいたので、きつと歌ってもらえる、と期待して待っていたら…お店の下まで来たんだけど

帰ってしまった、と一緒にいらした方に聞かされました。お店の階段を下から見て「3階まで上るのがしんどい」と言われたとか。確かに六本木のお店は階段が狭い上に急でしたから。その後いらしたご高齢の故ベティ・カーターさんや、大きなお身体のごサラ・ボーンさんも（お話は後で出てきます）さぞ大変だったろうと思います。

そんな時分の話。ナップザックを肩にサンダルを引っ掛け見すばらしいヘンな黒人が入ってきました。「困っちゃうなあ……」と思っていると、一昨秋天国に召されてしまったベースの岡田勉さんが私に耳打ちしたのです。「ねえ、あの人ドン・チェリーに似てない？」

名前を聞くと彼でした。その時も世界を放浪中の股旅姿またたびだったのです。背中のナップザックから、いつも持ち歩いていたポケットコルネットを取り出すと、岡田ちゃんらと演奏をはじめました。それが最初の出会いでした。それ以降コンサートなどで来日する度に頻繁にウチにやつてくるようになりました。

娘さん（ロック歌手ネナ・チェリーさん）の公演ではステージ・パパとしてやってきて、その楽屋でお会いした時もサンダル履き。いつもこの風体でやってきて、背中からポケットコルネットを取り出し演奏に加わりました。オーネット・コールマンと並んで、フリージャズの巨人ですが（私はフリージャズはあまり聴かないのですが）もちろんウチでの演奏はストリートな4ビートの素晴らしい演奏でした。（亡くなられてもう20年になります）。

そうそう、ステイービー・ワンダーさんがやってきた時もそうでした。彼がお店に入ってきてカウンターに座った時、その夜はたまたま来日中のエディさんがいたんです。で、私が「あら、ステイービー・ワンダーのそっくりさんが来たわよ」とエディさんに耳打ちすると「いや、彼はホンモノだよ」。

後で聞くとステイービーさんは、カセットテープの会社のCM撮りの来日で、来日していることは報道されていませんでした。これも後でわかったのですが、エディさんと一緒に来日公演していたステイーブ・ガッド(DG)さんに会いに来たのです。ボディ&ソウルに行けば会える、と誰かに聞いたんだそうです(その夜はいみじくも、ガッド人気も当時から世界的でした)。

彼は「ホットサケ」をオーダー。お燗をした日本酒が好きなようで、ちびちびと手酌で飲み始めました。世界のステイービーさんがそこに居る…でもとても「弾いてくれませんか」なんて言えないほど威厳があつてホンモノだと知ってからは私も緊張していました。その夜の出演者は故本田竹広さんのトリオでしたが、ステイービーさんを歓迎しようと、もう片付けてしまった楽器をセッティングし直して、当時彼が歌って流行っていた曲を演奏しはじめました。そうです、♪ You are the sunshine of my life、インストです。

すると、座って日本酒を飲んでいたステイービーさんがステージに歩み出てマイクを

握って歌い始めたのです。そうして歌い終わると、今度はピアノに座って、The shadow of your smileゝを弾き語ってくれたのです。お客さまはもうほとんどいませんでしたが（といっても当時はミュージシャンなどが、お店が終わってからもたまり場のようにしていました）私には忘れられない贅沢な夜になりました。

突然前触れもなくフラッとやってくるセレブには驚きますが、逆に、ピーター・フォークさんがいらした時には、私は思わず「まあ、コロンボさん、大好き」なんて。いつも時々テレビで観ていたので、前から知っていたような気持ちになつていきなり馴れ馴れしくしてしまいました。でも彼は、コロンボさんのようにニコニコ優しく笑っていました。もちろんヨレヨレのコートではなく、きちんと素敵なスーツ姿でした。

7

ウチにいらした多くのシンガーの中で、いま一番身近に感じているのはDDブリッジ・ウォーターさんです。馴れ初めは、ハンク・ジョーンズさんの弟、サド・ジョーンズ（サドさんの日比谷野外音楽堂コンサートで来日し一緒にウチに来たのが最初。その後すぐ「ソフィストケイテッド・レディ」の主役で来日すると度々来られるようになりました）。

私が踊り好きなこともあって、ステージで踊りながら歌う彼女をとて素敵だと思えます。気が合う感じです。いま国連で何かの機関の大使を務められているほど知的な方で、

ほとんど英語ができない私にもご家族のことなど親しく丁寧にお話ししてください。

5、6年ほど前にやって来たウチのカウンターで「私、孫ができたのよ」と写真を見せると、あら私もよ、と写真の見せ合いです。私の孫は8月8日生まれで、お店の誕生日と一緒に、と言うと、エッーまあ、私の孫も同じ年の同じ日に生まれたのよ。びっくりするやら喜ぶやら。同じ日にお婆さんになったのです。ますます身近に感じるようになって今は「良きババトモ」です。

女性シンガーの方はご家族の話をされる方が多いですね。先日、ブルーノート東京でのステージが終わったカサンドラ・ウィルソンさんが、バックのメンバー、ロニー・プラキシコ(Praxico)さんを伴ってウチにやって来ました。その夜はお客さまはもういませんでしたが、演奏を終えた大野えり(Ono)さんやグレース・マーマン(Marman)さんらを引き合わせると、ちょっとした歓迎会のような雰囲気になりました。

カサンドラさんは息子さんを連れて来日していて、「昔、Kyokoによくチャンバラの相手をしてもらってたけど、今はもう27歳になっているのよ」なんてことからはじまって、JALのあの人は今どうしているかしら、などと昔のことをよく覚えていらつしやいました。彼女がまだ無名で、東南アジアのホテルにハコ(一定期間、専属で契約出演すること)で出演中の頃、JALの機内放送で使われその録音のために来日してウチにやってきたの

が最初なのです。その頃は、グラミーをとってこんなにビッグスターになるなんて思いませんでした。彼女が来日公演の夜に部屋に呼んでマッサージしてもらった日本のマッサージ師の方は、昔私が彼女に紹介した方で、今も時々彼女の世界ツアーにも呼ばれて同行されるほど信頼されていて、ご紹介した私も嬉しいです。

一時JALの機内放送のジャズ・チャンネルは、ウチで録音されたライブが月替りで流れていました。その頃のJAL関係の多くの方は今でもウチの常連さんで、JALのお仲間や後輩を連れてよくいらしてくれます。

その頃のライブ録音はオーディオだけでしたが、映像付きのウチでのライブ放送としては、南青山店になってから、CS朝日の「源流Jazz」で時々放送されていました。私が推薦した、世に出てほしいミュージシャンによる「日本発世界のジャズシーン」を担う注目のジャズメンたちの熱くクールなステージ」という番組。

いい番組でしたが昨年終了。「Mint Jazz」という新番組名でCS日テレプラスに引き継がれ、ウチでのライブも時々収録され放映されていました。でもこれもこの春終了。ジャズ番組って視聴率がとれないことでは定評があるんだとか。企画がなかなか通らず、決まっても予算が少なく継続することさえタイヘンなんだそうです。新しいジャズの番組ができれば、皆さまぜひご覧いただいて視聴率を上げていただきたい、と思います。

ピアノの履歴

♪ I Should Care

映画「恋のときめき (Thrill of A Romance)」の挿入歌、直訳「私が気にすべきこと」。多くのジャズメンがカバーするスタンダード・ナンバーです。

ウチのピアノは私以上に過酷な働きぶり。私とウチの40年間を一番身近に見てきたのは、彼（ピアノ）かもしれません。私の「こだわり」と「いたわり」を綴ってねぎらいたと思います。

■ピアノの履歴

90年代に入つてすぐ「100ゴールド・フィンガーズ」というコンサートが日本で数年間行われました。ウチによくいらしていたオールアート・プロモーションの石塚さん（故峰純子（こ）さんの旦那様）がご尽力されて、当時NYで活躍していた10人のピアニストを同時に日本に招請したのです。「NYからピアニストがいなくなった」と言われたほどで、このコンサートのキャッチフレーズにもなりました。

バブルがはじける直前で、経済もジャズコンサートも「ジャパン・アズ・ナンバーワン」がまだ世界に通用していた時代。その最初のコンサートが行われた時のある夜のウチのカウンターが、まさにそれを象徴していました。来日したピアニストが大挙してウチにやってきて、細長いカウンターにズラッと並んだ夜がありました。

故レッド・ガーランド、故シダー・ウォルトン、故レイ・ブライアント、故トミー・フラナガン、故ローランド・ハナ、ノーマン・シモンズ、そして若きケニー・バロン……オリピックで言えばメダリストと言えるビッグネームたちが、長い鍵盤に向かってピアノを弾くように、横並びに並んでカウンターの中の私に向かっていたのです。

そのうちに（誰か忘れましたが）ピアノを弾きはじめました。そして一曲弾き終わると、

私もく〜という感じでカウンターに座っていた端から順に入れ替わり立ち代わり弾きはじめたのです。まさにキャーっという感じのレジェンドたちの競演です。私もまだ40代で若かったせいかしら、そんなに大変な出来事ではなく、よくある日々の一日という感じでした。その頃は今のよう^にに手軽に写真を撮る時代でもなく、そのかわり初めて訪れると落書きするように、ドアや壁面にサインを残していきました。

当時は日本よりNYで、特にミュージシャンの間で有名なお店、と言われたほど。東京のウチのお店で知り合いになつて、NYに帰ってから共演するようになった、なんてミュージシャンもいます。旅先での出会いは親しくなるきっかけになりやすいのかもしれない。私がNYに遊びに行つてジャズクラブに行くと、どこでもきつと誰か、私を知るミュージシャンが演奏していて歓迎してくれました。今でも観光でNYに行きジャズクラブを訪れた常連の方が、どこに行つても京子ママによろしくと言付け^{ことず}を預かつてきた、とお土産話をされます。向こうに行つた若いミュージシャンも、ウチや私の名を出すと話が早いという事です。狭い業界ですから、どうぞ皆さん大いに利用してほしいと思っています。

でも、そんな彼らの話や名前を聞いて、なんとか顔は思い出せますが、いつお会いしたかしら：もう思い出せない歳になつてしまいました。私自身は（とても残念ですが）もう長いことNYに行けていません。

それはそれとして、考えてみるとウチのピアノは、物凄いピアノリストたちに弾かれてきていることになります。トップの天板（大屋根）にサインしてもらえばよかったかしら……もつともウチのピアノは実は今4代目なのです。ことのついでにウチのピアノの履歴をお話ししたいと思います。私がこだわり続けていることですから。

六本木でお店を始めた初代のピアノは、C3という小さな（一般の家庭用グランドピアノのサイズ）のピアノでした。ピアノの周りにカウンターのがある、弾き語りのお店でしたから。で、本格的ライブハウスとして改装する時に新しくしました。もちろんスタンウェイとかベヒシュタインとかにしたかったのは山々でしたが、お店が小さい上に一千万円以上もするピアノを買う余裕などありません。

調律の方に相談すると、楽器は個体差が大きい。ヤマハだつて決して引けを取らないものが探せばある。それよりメンテナンスが大事だ、と言われました。そこで、山本剛（さかもと）さんに浜松の工場に行つてもらつて、出荷を待っているたくさんさんのピアノを一台一台すべて弾いてもらつて、一番鳴りのいいピアノを選んでもらったのです。それが2代目。

六本木から北青山に引越す時にピアノも新しくしました。だつて壁を壊さないと外に出せないお店でしたから、簡単には持ち出せません。この3代目のピアノはC5というちよつとだけ大きいサイズ。この時も、たくさんの中から選んだものでしたが、でも2年

経たないうちに今の南青山に引越すことになりピアノも取り替えました。バブルの地上^{じあ}げで代替地として急いで決めたお店は狭く、音がこもってピアノの響きも悪かったのでもう少し大きなピアノにしたかったのです。

また調律の方に相談すると、C7という少し大きなタイプは、今はなかなかいい木材が入手できなくて、新しく作られたものはあまりお勧めできない。木が一番いい時期に作られたピアノを探すのがいい、と探してきてくれたのが4代目。

5、6年前にピアノの弦が時々切れるようになって、箱の中身（弦のある響板部分）をそっくり入れ替えました。鳴りのいい箱や大屋根は残しましたが、中身は全く別のピアノです。小さな新品が買えるほど費用がかかりその3ヶ月間は代替のピアノでした。そのピアノも去年の改装時に1週間ほど、鍵盤部分のオーバーホールに出しました。つまり今のピアノは箱は4代目、中身は5代目です。この代だけでも物凄いピアニストたちが弾いてきたピアノ、競売に出したら高い値がつくかしら（笑）

現在ウチではピアノの調律は3、4日に1度。ついこのあいだまでウチの調律をされていた方は、日本ではトップクラス、世界レベルの調律師で、小曾根さんの世界ツアーにもご同行なさっていた方です。惜しくも亡くされました。少々高くても上手な方の調律は「日持ち」が良く、へたな調律だとスグに音が狂ったりします。

楽器、時にピアノは湿気が大敵です。ウチでは24時間365日、お正月休みにも冷房の除湿を効かせ、ピアノの下に置いてある除湿機が24時間働いています。3〜4日もするとその除湿機のタンクにバケツ1杯ほどの水がたまります。梅雨時なんか一日でバケツ1杯。そんなメンテを怠りなくやっていますが、雨の日には少し鳴りが悪くなります。

去年の改装時に、ピアノ下の荷物を片付け、板のステージの床面から出ていたピアノの脚を1本、床面に乗るように少し移動しただけで、音の響きがビミョーに変わったほど（耳の良い方でないと分かりませんが）。ピアノは生き物です。手間もお金もかかります。

お陰様でウチのピアノはピアニストにも評判が良くて、このピアノだと自分がうまくなつたような気がする、なんて方もいます。来日されるピアニストがやってきてシットインで弾かれても、ピアノがいい鳴りをしているとも言われます（これはちょっと自慢です）。

連日酷使されているという意味では、ウチのピアノは私以上です。米国を拠点に活動されていた頃の小曽根さんも、先日亡くなった菊地雅章さんも、日本に帰ってきた時にはウチのピアノで昼間よく練習されていました。一台のピアノを毎日違うピアニストが弾きますから、楽器を大切にしない乱暴なタッチのピアニストは、つい敬遠してしまいます。

そして、同じピアノを弾いているのにその鳴り方はピアニストによって全く違って聴こえます。何百分の1秒かの「タッチ」の違いでしょうか、丸く響いたり尖って響いたり、

柔らかく響いたり固く響いたり、重く鳴ったり軽く鳴ったり、余韻が湿っていたり乾いていた……メンテナンスの行き届いたいいピアノでないとそれがわかりません。

時々、よそのお店にライブ演奏を聴きに行くことがあります。音が綺麗に響いていないと気になって仕方ないのです。演奏の善し悪し以前の問題。特にピアノの音に関しては、少なくとも私の耳が満足しないと、ピアニストに気の毒になり、その場にいられなくなってしまうのです。(再三で恐縮ですが、私は毎夜ライブジャズを聴いてきているせいで、耳だけは肥えて、贅沢になっていると思います)

もちろんドラムの音にもこだわりがあります。ウチのように小さなお店では壁の反射が大きいですから、特にシンバルが金属っぽくうるさく響くタッチのドラマーも敬遠です。これもテク以前の問題。ブルーノート東京とかNYビレッジ・バガードなんかでは、ステージのバックに吸音用の厚いカーテンが下がってありますよね。でもカーテンはあまりミバがよくありません。そのかわりウチのドラムセットの下にはゴムマットや厚い防音マットを幾重にも敷き、天井には吸音用のシートが何枚か下げてありますでしょ。

こうした設備や今の南青山店のPA装置は、かつてほとんどの大きなジャズ・コンサートのチーフPAエンジニアをやっていた方にお任せしてできあがったもの。その方は若くして突然お亡くなりになられて……機器は相当高価でしたがメンテナンスしながらもう25年

にもなり、新しくしたいのですが…私は音に關しては妥協したくないので、多分相当高価な機器になつてしまいそうで、なかなか手が出ません。これも残念です。

クラシックのコンサートと違って、ジャズは所詮賑やかな音楽だし…というのは全く逆だと思います。個々の楽器がよく聴こえるジャズ・コンボだからこそ、小さな空間だからこそ、音やバランスにこだわるべきだと思っています。

昨年、突然ウチを訪れてくださった、Bエバンストリオとの共演アルバムで知られるジャズフルートの巨人、ジェレミー・スタイグさん。お会いできたのは20数年ぶり。六本木時代エディさんらとウチで来日演奏されて以来でした。当時も演奏の合間にひたすら絵を描いていましたが、その後イラストレーターとして活動し演奏活動から身を引いていました。

日本人の奥様と結婚された5、6年前から横浜に住み、年に何回かウチに出演してくださいますが、空舞台でのリハから客席の埋まり具合を気にして、PAを細かく調整されます。ご自宅にスタジオもあり、音と音楽に対するこだわりもハンパないです。ですから共演者も演奏場所も厳選され、多くの出演オフアーにもホイチョイとは出演されません。

演奏者も、耳の肥えたお客さまも、そして何より私自身が満足する音でないと（人間が楽器であるボーカリストも含めて）お店のオーナーとして申し訳なくて、その場から逃げ出したいくなります。私が音にこだわる理由です。

私が
ジャズに
飽きない
のは

♪ My Favorite Things

ワダバ スクナモワ マンズ ジャズ。東北地方は寒いので、なるべく冷たい空気を吸わなくていいように節約して、口をすばめて発声し、おまけに言葉が短くなるんだそうです。今、津軽弁ジャズという新たな世界を切り拓いているペコちゃん（伊藤君子）が言っていました。

■私がジャズに飽きないのは

「音のいいピアノ」を自慢させていただいたついでに、ウチのウェブサイトの宣伝がてら、「ジャズという音楽」について日頃私が感じていることなどを書いてみます。

実は、一番ウチで演奏され歌われるのは ♪ Body And Soul ではありません。♪ My Favorite Things です。詳しく調べたことはいませんが、時々演奏される ♪ Body And Soul を超えてこの曲なのです。

出だしの3〜4音を聴くだけでわかるこの曲を、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の中で初めて聴いた方はもう少なくなっただしょうね。いま世の中の的には「鉄道会社のレビCM」と言ったほうが通りがいいかもしれません。でも、これを知らないジャズファンはモグリ、といってもいい、それほど馴染みの曲ですよ。

新宿の片隅、百人町にウチが産声を上げた1974年頃は、まだ若者文化の中心は新宿でした。その中核にあったのが音楽喫茶。クラシック、フォークソング、ロック、ジャズ……当時普及しはじめて間もないLPレコードを、リクエストに応じて聴かせる喫茶店が新宿にはたくさんありました。特にジャズ喫茶はほとんどのお店が深夜営業で、コーヒー一杯で朝まで居ることもできましたが、どこのお店でもコルトレーンの演奏するこの曲が、

昼に夜に何度もかかっていたつけ。(最近はこの曲のコルトレーンの演奏を知らない若い方もチラホラいます。昭和は遠く…そんな時代なのですね)。

ウチがホームページを本格的に立ち上げた2007年からもう丸8年になりますが、その時から毎夜のステージの様子と演奏曲名をブログとしてレポートさせていたいています。最初のきっかけはお客さまから「昨夜聴いたあの曲名を教えてほしい」という問い合わせが時々あったからです。せっかく私自身がステージを毎夜聴いているのだから、他のお店ではできないことをしなければ…と思つてはじめたレポート・ブログです。

8年もやっている「マンネリ」と言われそうですが…ホームページ上で事前に出演者の案内をしているお店は多くても、事後に報告してくれるお店を知りません。ウチをご贖員ひいにさせていただいている方に応えたい、毎夜お店に出て一緒に聴いている私にしかできないのだから…そう思つて毎日続けています。「継続は力なり」を信じて。だつて「マンネリ」はそれなりの歳月続けないと、どんなに才能があつても一朝一夕には達成できませんものね。その意味では「偉大なるマンネリ」、バカにできません。

マンネリとはいえ嬉しいことに、毎日楽しみに読んでくださっている方や、ご来店くださった方が、事後にも楽しめるとお褒めくださるこのブログのファンの方がけっこういらして、それを励みに今では私の日課になっています。そのブログの中で、そうですね週に

一度はこの曲名を書いている気がします。ジャズ喫茶でかかっていた頃以来40年たった今も、この曲の人気は廃すたれません。名曲中の名曲なのですね。

「ジャズに名曲はない、名演があるだけだ」なんて言う人もいます。まあ確かにジャズがオリジナルで世の中に大ヒットした曲は少ないですかね。(クラシックもそうかもしれません) この曲はその代表かもしれません。

ちなみに、前夜の演奏曲を書いているレポート・ブログで、やはり4〜5日に一度書いている感じなのが作曲者としてのアントニオ・カルロス・ジョビンです。ジョアン・ジルベルト(妻がアストラッド)とともにボサノバの創始者として有名ですが、ビートルズの次に世界中でカバーされている作曲者だそうです。スタン・ゲッツがジャズの世界に持ち込んで以来ジャズ・ミュージシャンのカバーも数多く、ウチでもよく演奏され歌われます。私の場合は、物心ついてからこれまでジャズしか聴いてこなかったもので、よく知られている曲もジャズでカバーされてから聴いた曲の方が多いかもしれません。最初に接して聴いたものが自分の中のオリジナルだとすれば、ビートルズにしろマイケル・ジャクソンにしろ、私のオリジナルは、ほぼジャズでカバーされたものなんです。

よくテレビの懷メロ番組などで、ご本人が昔の持ち歌・流行歌をシンクペーションや、ヘタするとメロディーまで少し変えてカッコよくモダンに唄われることがあります。ご本

人にとっては進化・進歩なのかもしれませんが、私は違和感を覚えて楽しめません。人は最初に接して聴いたものが自分の中でのオリジナルとして定着しているのかもしれませんが。その点ジャズは、歌手や演奏者の表現の自由度が高い音楽です。さまざまなアレンジで歌い演奏できます。つまりジャズに関しては、演奏そのものがジャズ。だから最初に聴いたオリジナルでなくても違和感なく、進化・変化自体を楽しめるのです。

確かにジャズは理屈の多い音楽かもしれませんが。孫の本を探しに時々行くのですが、自宅に近い東急本店に1フロア全部が書棚になっている大きな本屋さんがあります。そこにミュージックというタグの下がった書棚があつて、シャンソンとかラテンとか…音楽ジャンルごとにさらに分けられた棚は、ジャズのところが一番たくさん、数倍の書籍が並んでいます。難しい音楽、と日本人を遠ざけているひとつの理由かもしれませんね。

お客さまに、ジャズって何ですか、と定義を聞かれることがあります。ブルー・ノート音階で、4ビートで…なんて簡単に言えればいいんですが、ご存じの♪Take Fiveをはじめ7拍子だつて中には13拍子だつて、変拍子のものはいくらもありますしね。私は難しい音楽理論はわかりません。でも演奏者が、これはジャズだ、と言えばそれもジャズ、そのくらい自由度の高い音楽だと思っています。(と言って、英語で歌えばジャズだ、っていうボイストレーニングもしっかりされてない演歌風シンガーも困っちゃいますけどね)。

ドラマーの故シェリー・マンの言葉に「僕らは、2度同じ演奏ができない音楽家なのさ」というのがあるそうです。そう言えば昨年のリニューアル・イベントで、小曽根さんがこんなジョークを言って笑わせていました。1セット目と2セット目で同じ曲をやった時「ジャズっていいよね、ちよつとズルして同じ曲をやっても、全く違って演奏できるからねえ」ジャズの本質かもしれません。私がジャズに飽きない理由のひとつです。

ジャズ喫茶と違ってライブジャズの場合、お客さまからリクエスト曲を受けることはまずありません。特にウチの場合はオリジナル・ユニットに出演していただく以外に、私が組ませたいミュージシャンをピックアップして編成する場合が多いこともあります。初顔合わせもあつたりして、リハーサルしてない曲はステージに掛けられないからです。

シンガーにしても、どんな曲でもすぐ応えられるほどレパートリーは多くありません。ジャズのスタンダード曲、と言われるものだけで百曲以上はあるでしょうか。日本語の歌ならまだしもジャズは英語ですから、そう急に引き出しから出してその場ですぐ歌うことは難しいのです。でもこの曲♪My Favorite Thingsならリクエストに応えられるはず。あるいはインスト・ジャズの場合、オリジナル曲の演奏だとわかりにくい演奏者の実力やセンスも、お馴染みのスタンダード曲、例えばこの曲の演奏なら違いがよくわかると思います。(リクエストを受け付けてくれるかどうかは別ですけど)。

もつとも、シットインで飛び入り演奏する楽器奏者の場合、あるいは一流シンガーの場合、スタンダード曲ならどんな国から来たどんな初対面の人でも、アイコンタクトだけで一緒に演奏されたり初対面のバックینگで歌われます。しかもすぐに打ち解けて仲良くなります。音楽は世界の共通語、そしてジャズ演奏は楽器でする会話です。彼らのする会話を聴いて楽しめるのもジャズならでは。ジャズという音楽を素晴らしいと思うことのひとつです。そんな会話ができるジャズ・ミュージシャンを羨ましくも思います。

この曲を、日本語のしかも津軽弁で唄うのがペコちゃん（伊藤君子）です。歌の上手さという点では、いま日本で右に出る人がいない（と私は思っています）ペコちゃんが歌うせいもあるでしょうが、津軽弁のこの曲はとても味わい深く、英語の歌詞に決して引けを取りません。訳詞された、伊奈かつぺいさんの名訳のせいもあります。

そもそもは彼女が、伊奈さんとジョイントコンサートをしたのがきっかけ。彼女は淡路島出身で津軽弁とは無縁の育ちですが、伊奈さんの指導を受けてトレーニングし歌ったのがはじまりです。英語より発音が難しく、滑舌が確かなシンガーにしか歌えません。聴いていても意味がサッパリ、英語のほうがまだわかります。

キワモノではありません。今ではレパートリーも十数曲にもなり、2枚目のアルバムも出るような彼女のオリジナル・ジャズ。特に東北地方の、ジャズに縁のなかった人々にも

支持されて、ジャズファンを増やすのにも一役買っている創造的でない仕事だと思っています。その輝かしき第1号がこの曲。標準語（東京弁）より確実にジャズのリズムに良く乗ります。もうひとり、沖縄出身の蘭ちゃん（大城蘭）。彼女は現在、双子を含む三人の男の子、という大変な子育て中でライブ活動は休止されていますが、彼女が唄うこの曲は沖縄弁です。こちらでも違和感がありません。さまざまに歌われる、という意味でも名曲なんでしょうね。ジャズに乗る言語・乗らない言語、と言うのはあるかもしれませんが。そういえば、標準語（東京弁）やフランス語の「ジャズ・ボーカル」ってあまり聴きませんよね。あつ、いました。昔六本木のお店で、剛ちゃん（山本剛）をバックに歌っていた安田南さん。消息をとんと聞きません。お亡くなりになったという噂も聞きますが…

ボーカルに限らず私は、音楽そのものにもネイティブな言語があると思っています。ジャズはアメリカ発祥の音楽ですから、特にアメリカ英語は「ジャズに乗る言語」なんです。いわばジャズのネイティブ言語。だって外国人ピアニストをはじめアメリカ生活が長かったピアニストは、「ピアノを英語で弾いている」のです。管奏者でも、楽器がよく鳴りよく歌っていて素晴らしい！と私が感じる人は（歌詞があるとかないとかは関係なく）楽器を英語で奏でています。スピード感グルーブ感…ジャズは音符そのものがアルファベットでできているのかもしれない。

昔テレビで見て納得したのでアタマに残っていることがあります。リズムと民族性とは「履物」^{はきもの}が大いに関係あるという説です。日本人の音楽の底流にあるリズム、それは草履^{ぞうり}。基本的に引きずって歩く履物なので、跳ねるようなリズムや破裂音的なサウンドはDNAとして身についていないんだとか。宮中の雅楽などはその典型だそうです。なるほど。

DNAといえば、これまでジャズの世界で日本人が太刀^{たち}打ち出来なかったのがドラムスです。黒人のDNAがすでにジャズのテストを持っているのでしょうか、身体に染みついたリズム感や演出力が違うように思います。ピアニストやフロント奏者などは優れて世界的な日本人奏者も数多いですが、ドラムスとなると（もちろん人にも依りますが）やっぱり黒人に分があります。

最近の若いドラマーは、大学でしっかり基礎を勉強されていて譜面にも強く、作曲もアレンジもされます。テクも演出力も決して遜色ありません。でも黒人ドラマーのジャズはどこかニュアンスというかテストというか違います。最近ウチによく出ているジーン・ジャクソンさん（彼は長い間ハービー・ハンコック・トリオのレギュラーメンバーでした）やジミー・コブさんを聴いていて思います。決して出しゃばらない。それでいてコンボサウンド全体を「粹に」演出する。私の好きなドラムです。ドラムに限らず何事にも言えますが、ことさら主張するのではなく、凄いことはさりげなくフツにやってこそ凄い。

ウッドベースのあの粒だって唸るような音とグループ。これも黒人ベースリストのDNAに依よるところが大きいと思います。ヨーロッパのジャズが、ちよつとフリージャズっぽいのもDNAのせいかもしれない、とも思います。

時々聞かれることがあります「ご自分で歌ったり楽器を演奏したいとか思わなかったのですか」。私の場合は踊りがそれに当たります。それに多分私は、素晴らしい演奏に早くから接し過ぎてしまったのかも。あのスリリングなスピード感、あのグループ感…自分はとてもあんなプロにはなれない、と勝手にハードルが上がってしまったようです。

例えばシンガーの場合、今は下手なプロ顔まけのカラオケ・プロがたくさんいます。でもガイドメロディがない「プロオケ」で歌ってみると、プロの歌唱力がわかると思います。でもそれもほんの基礎。一流のプロは、その上に独自の表情豊かなオリジナリティーがあります。たくさんの方のホンモノを知った上で、オリジナリティーを出すのってとても難しく、努力と才能のいることです。ピカソの初期の写実的な絵に見られるデッサン力だって、並ではありません。それがあるからあの独創的で素晴らしい絵が描けるのだと思います。

私は音楽を勉強したわけではありません。これらはあくまで、私が40年ライブジャズの現場でジャズを聴いてきただけの浅はかな知識にすぎません。これがホントの「耳学問」。

それで今も飽きないで商あきないをやってる…ナンテ（笑）

酷寒のジャズ

♪ Guess Who I Saw Today

「私、今日、誰に会ったと思う？」ナンシー・ウィルソンさんの持ち歌代表曲で、彼女の多くのアルバムに入っていると思います。語るように歌うシャンソンのような歌なので日本人には難しいのか、ウチでは、ほとんど歌われませんけど。

ジャズは、酷寒のマンハッタン真冬のストリートで鍛えられるのかもしれない。

■酷寒のジャズ その1

ニューポート・ジャズ・フェスのドキュメント映画「真夏の夜のジャズ」以来、日本では特にジャズは夏の音楽と思われるがちです。ジャズフェスも日本では夏の風物詩ですが、私には真冬こそジャズ。

例えば…酷寒、人道りの絶えた深夜のマンハッタン。凍てつく空気を切り裂いてビルの谷間に響くストリート・ミュージシャンが吹くトランペット…。管楽器の音に目を閉じるとそんな情景が浮かびませんか。これこそNYサウンドですよねえ（って私だけかしら）実際、私が訪れた何回かのNYもそうでした。

もう大昔、街が荒^{すさ}んでいて、落書きだらけの地下鉄なんか怖くて一人では乗れない、イーストビレッジのABCアベニューの先には廃墟がちらほら、ソーホーだって空き倉庫がいっぱい、マリファナだってそんなに厳しくなかった退廃的な緊張感…（私の中ではそんなNYとモダンジャズが今だに分かちがたく結びついています）そんな時代のNY、ペコちゃんらがNYで修行してた頃、会いに行きがてら遊びに行った時の話。

街をブラブラ散歩してたら：「あら、タウンホールってここにあったんだ」。タウンホールは多くのライブ盤のタイトルになっていて名前はよく知っていました。中はどうなっ

いるのかしら、とガラスに映る自分の顔を隠すように手で覆い顔をガラスにくっつけて中を覗きました。すると、受付スペースのソファで寝転んでいた黒人が私を見つけて「OHhhhh Kyoko」と叫んだのです。そうしてメ切中の入り口の扉を開けてくれました。レジー・ワークマンさんでした。(レジーさんは、コルトレーンをはじめ多くのビッグネームと共演されているベーシストです)。

案内されるまま、誰もいない暗い客席を縫って明るいステージに近づいていくと、皆さんが口々に「Hi Kyoko」と言いながらハグの嵐。セシル・マクビー(C)さん、マッコイ・タイナー(P)さん、グラディ・ティト(dsvo)さん、故フレディ・ハバード(tp)さん…皆さん六本木のウチのお店にやってきたことのある人たちがリハーサル中。ヤアヤアよく来たなあ、と大歓迎してくださいました。「私、観光旅行中なの、今夜ちゃんとチケット買って聴きに来るわね」ということで外に出ました。

2月のNY、とりわけて寒い日でした。その夜、タウンホールに行くとき長い行列ができていました。私は「招待客」としてすんなり入れましたが、その列の中に、まだほとんど無名だったケニー・ギャレット(k)さんが楽器を持って並んで立っていました。あら、なんでここに居るの？すると、当夜のコンサートの最後にジャムセッションがあるからシットインで吹かせてもらうんだ、と寒空の中、一般客に混じって並んで待っていたのです。

今ではケニーさんはチャーリー・パーカー以来のアルト奏者なんて言われるほどジャズシーンに欠かせないビッグな存在になりましたが、「ソフィストケイテッド・レディ」の日本公演で（この時はDDブリッジ・ウオーターさんが主役を務めていて、すでに知り合っていた私は楽屋に会いに行きました）彼はそのミュージカルのオーケストラ・ピットの一員で、まだ無名でしたが一人だけソロをとって吹いた実力者でした。その公演の時、楽屋で会って話した彼がウチのお店にやって来て吹いてくれました。

その時ケニーさんに「このまま日本に残って活動したい」と相談されました。でも私は「日本でなんか絶対ダメよ、向こうでガンバリなさいッ」と言ったことがあったのです。帰国してから、大手レコード会社と契約出来たとかマイルス・バンドのメンバーになれて嬉しいとか、活躍し始めるとその度に連絡してくれました。そんな彼でさえ、ジャムに参加するために寒空に並んで待っていたのです。

その夜のタウンホールで、セシル・テイラー(Pt)さんの演奏を聴いたこともよく覚えています。そのセシルさんは東京に帰ってきてから程なく、六本木のウチのお店に山下洋輔(Pt)さんと連れ立って一緒にやって来ました。そして「キミのために弾く」と弾いてくれましたが、私は前衛ジャズはあまり好きではなく、全体は何を演奏しているのかわかりませんでした。が、途中でわずかに「I'm all for you Body and Soul」のメロディーを聴き

取ることができました。旋律があまり良くわからない中に聴こえきたそのメロディーが際立って、あまりに素晴らしくて私はなぜか涙が溢れてきました。

かつて日野皓正さんが言っていました。NYに渡ってすぐ「向こうの連中は楽器で出せる音量が違う。最大限に大きな音が出せるから、小さな音も美しい響きで自在に出せるんだと気づいた」とか。だから当初は、普通に吹いて十分大きな音が出せる、そんな練習を随分されたそうです。

日野皓正さん（お兄ちゃん、私たち親しい人は日野皓正さんのことをこう呼ぶのが普通です）と故日野元彦さん（通称トコちゃん）兄弟とはもう40年以上前からの付き合いです。六本木時代、お兄ちゃんはNYから時々帰ってくると、ほとんど毎晩のようにウチに現れてシットインで吹いていきました。そんなに毎日大変でしょ、と言うと、「いや、1日でもちゃんと吹かないと唇が乾いて切れて痛いんだ」。一流の人は違うなあと思いました。

NYで一人前になるのって、並の努力じゃ^の伸し上がれないんだな、と思います。今も時々ウチに出演したりシットインで演奏されるNYで活躍するミュージシャンたちの演奏を聴くと、いつも「やっぱりNYね」と思わざるをえません。スピード感が全然違うのです。それに楽器がよく歌い鳴るのです。NYで活躍するジャズ・ミュージシャンのレベルが高いことを肌で感じたタウンホール前の冬の出来事でした。

7 追記

記憶をたよりにほとんどとりあえず書き終わってから、親しい人にこの本の話を持ち出すとすると「本には写真が何枚か入っているんですよ、楽しみだワ」と言われました。あら、どうでしょう…

私は根っからノータンキで大雑把な性格で（良く言うとおおらか、悪く言うとおズボラ、感性だけで生きているから情に流されるんだ、とある人によく言われます）きちんと写真アルバムとして残しているでもなく、お客さまが撮ってくれた写真も引き出しの奥の方にとりあえずしまったきり。それさえも自宅の引っ越しの際に捨てたのかどこかに紛れ込んだのか…ほとんどが雲散霧消してしまつて残っているものはほとんどありません。

物置（といっても小さなマンションですから地下にほんの二畳ほど）に積んである段ボール箱を引っ掻きまわしたら…くだらないモノばかりが詰まっていた中に、湿気でくっついて剥がせないような大昔の写真が何枚か出てきました。この本に載せたのはその中の「損傷」が少なく何とか使えそうな写真だけ。（もともと自分が被写体になるのはあまり好きではありませんが、こんなことならきちんとつておけばよかった。後の祭りですね）。

そのガラクタの中から「SKD13期生の今」という小冊子が出てきました。どなたかが同期会のために、各個人から送られてきたものをコピーして手作りですとめたものです。

皆さん近況がご自身の筆致で綴られていましたが、私はズボラな性格が出たのか、ちょうどその時期に掲載されたウチのお店の記事と、記者の方が撮ったお店のステージ風景写真を提出して済ませたのだと思います。

実際、新聞や雑誌でもこれまで何回もお店の紹介記事が掲載されていますが、どれひとつとしてスクラップしてきちんと残してありません。たまたまSKDの同期会の方がこんなカタチで残しておいてくれました。

お陰様で昔の新聞記事を読むことができました。もう12年前ですね、記者の方が取材に来て、私が適当にいろいろお話しした内容を、またきちんとウラをとる取材までして掲載してくれてたのです。さすがプロの文章です、お店とジャズについて私が話したことをとても上手に書いてくださっていました。内容がセシル・テイラーさんのことでしたので、ここでその記事を転載させていただきます。

「日本へ行ったら、BODY&SOULに顔を出したほうがいい。こっちじゃなかなか会えないミュージシャンとセッションできるかもしれないから」ニューヨークジャズメンの間で、こんな風に語られているライブハウスが、東東・南青山の住宅街の一角にある。地下に位置する店のシンボルは、カウンター近くの壁に埋め込まれた古びた鉄扉。目を凝らせば、数え切れないサインが描き込まれている。

アート・ブレイキー、ミルト・ジャクソン、チック・コリア、ステイービー・ワンダー…彼らのほとんどがライブ出演のためではなく、まったくのプライベートで訪れたのだと知った時、二重の驚きに包まれる。

オーナーの関京子が店を構えたのは、一九七四年、店名は、有名なスタンダードナンバーからつけた。曲名通りに「身も心もジャズにささげる。そんな思いを込めたのよ」。

関の心を今もつかんで離さない演奏が行われたのは、まだ六本木に店があった十五年前のことだ。その日、ピアニストのセシル・テイラーは山下洋輔に連れられてふらりと現れた。店に残っていたのは、ライブを終えたミュージシャンと店のスタッフら十人足らず。「君のために弾くよ」。関の顔を見てつぶやいたセシルは、おもむろにピアノに向かった。

鍵盤に指をたたきつける激しいタッチと、全速力で駆け上がったのは急降下する音の繰り返し。これこそがフリージャズの特徴なのだが、草分けの一人、セシルの演奏は、周囲の予想に反して、穏やかに始まった。次々と紡がれていく、静ひつな美をたたえた旋律の数々。完全な即興だったが、途中でBODY&SOULのテーマをはさんだことだけは分かった。

「気がつくとも、私もスタツフもぼろぼろと涙をこぼしていた。訳もわからずに泣いたのは後にも先にもあの一度きり」。

山下も、あの日の光景を鮮明に覚えている。「その場でクリエートされた渾身の即興演奏。ステージでは見られぬ、かけがえのない場面が今、目の前で繰り広げられているんだと思いました。京子ママのジャズに注ぐ愛情が、セシルに伝わったんでしょうね」

名演とは、一流の奏者と一流の観客の心が一つになった時、初めて生まれるもの。関はそう信じている。だとすれば、強面の「フリーの闘士」が繰り広げた、つかの間の素顔の演奏は、BOBY&SOULという空間が生み出した奇跡だったのかもしれない。

■酷寒のジャズ その2

今年（2015年）北海道の根室は記録的な大雪だったようですね。私も心配で何度かお電話しました。というのも、根室は私にとって、とつても縁の深い街なのです。

根室はジャズの街、それも日本最東端のジャズの街なのです。根室流水ジャズ祭り、というフェスティバルがありました。漁師の方がほとんどでしたが、漁業組合長、郵便局員、商店主、医者、建築屋……など街のジャズ好きが集まって、お仕事が比較的暇になる酷寒2月、ちようど近くの納沙布岬に流水が着岸して海が埋まる頃、街の公民館でコンサートを行う手作りのフェスティバルです。

トコちゃん（故日野元彦）に「流水」という曲とアルバムがあり、その縁で彼が出演者を選し、私も一緒に参加することになったのがこの地を訪れた最初です。その後主宰者が変わって、私が出演者の人選を任されるようになり、1980年代ほぼ10年間、毎年違うミュージシャンを連れておじゃまして、主宰者の皆さんの歓待を受けごちそうになり、1日遊んでくるイベントが恒例になりました。昔のことで誰といつ行ったのかそのアト・サキを定かに思い出せませんが「酷寒」で思い出したそのエピソードを少し。

NYにいたプーさん（菊地雅章さん）、この本を書きはじめて折しも訃報が入りました。

レクイエムの章で後ほど書きます）がお仲間を連れてコンサートのために日本に帰って来ていた時。ベースのゲイリー・ピーコックさん、ビル・エバンストリオのドラマーだった故ポール・モチアンさん、この年に根室に行ったのは3人だけだったかしら。

前夜に根室の方のご自宅で焼き肉を食べた時のこと、お肉が硬かったわけではありませんがポールさんの前歯が折れてしまいました。翌日のコンサートでドラムに力が入らない、ということでも急遽、^{きゆうきょ}紹介された街の歯医者さんに行って応急手当をしたことがあります。管奏者なら大事でしたが幸いドラマーでよかった。^{おとがず}音数の少ない、でもセンスのいい素敵なドラムでした。

まだそんなにメジャーではなかった頃の大西順子さんに行った時、彼女は根室がよほど気に入ったらしくてまだ帰りたくない、とわがままを言いはじめました。それで予定を延長して温泉宿に泊まり、翌日は皆んなで船に乗りこみ海釣りに興じました。

彼女は、演奏はもちろん素晴らしいのですが、アーティスト特有の「我が道を行く」的なところがあります。突然、引退宣言をしてお料理をはじめたり、焼き物をするからと山に籠もったり。数年前、引退宣言を取り消してウチで演奏した時には、サイドメンに背を向ける形でピアノをステージの右側にセッティングして弾いたり…。でもその時の彼女のわがままのおかげで、その年から一行の日程が温泉宿に二泊するように変わったのです。

最初の頃は、佐藤允彦さん、峰厚介さん、山本剛さん、故日野元彦さん、故岡田勉さん、土岐英史さん、故上野尊子さん：今みると錚々たるメンバーですね。凍りついた入江で靴ホツケーに興じたり、仕掛けてあつた氷の下こまの網を、氷に開けた穴から地引網のように皆んなで引つ張つて、氷下魚こまを（まさに氷下魚です）捕ったり、干したものをストーブで焼きながら昼酒の肴にしたり：夜が遅い仕事をしている私やミュージシャンにとつてはとてもいい心身のリフレッシュでした。

二泊するようになってからは、TOKUさん、NYから帰ってきたばかりの綾戸智恵さん、寺井尚子さん：。ペコちゃん（伊藤君子）やチャリートさんとはもう何度も行っています。故本田竹広さんで行った時に大笑いした宴会のことは忘れられません。当時腎臓を患つていて透析中のお身体でしたが彼は大酒を飲んで、ベロベロに酔つ払つて浴衣姿でピアノを弾き終わると、何だか訳のわからない踊りを披露して大爆笑で盛り上がったのです。力ちからいっぱい？ヘンテコなおかしさで、お腹の皮がよじれるほど大笑いしましたっけ。

このフェスティバルは形を変えて若い方に受け継がれ、今も続いています。その頃の方は今だに時々上京してウチにいらしてくれたり、地元で捕れたいろんな魚介類を贈つてくださいます。コトのついでに、私の「地方巡業」について書いておきます。

ウチのお店には熱烈なジャズファンでリッチな方も多くいらつしやいます。古くからの

常連さんで、今も九州で事業をなさっているOさんが主催する1日だけのコンサート。個人の主催ですから、ステージは特設屋根の海辺の野外コンサートです。ウチによく出ているミュージシャンを連れて行きました。前日はいつも温泉宿をとってくださるので、私自身とミュージシャンの慰安会を兼ねて、何年かおじゃましました。

ある年、その日台風が九州を襲い、ステージの屋根が強風で吹っ飛んでしまいました。チケットは売り出していないので気は楽でしたが、小雨の中の「露天」決行です。ピアノをビニールで覆い、手の空いている人が演奏者に傘をさして演奏したのです。私は、横山達治さん担当。パークションなので傘を差し出す場所があちこち動いて大変でした。

あるいは、剛ちゃん（山本剛）の大ファンの方が岡山にいらして、ご自宅での個人コンサートに一緒にお招きいただいて、楽しい夜を過ごしたことも何回かあります。

豪華な「地方巡業」もあります。今から5年前、小曽根さんが主宰する「ノーネームホーム」の欧州ツアーに、小曽根さんが私も一緒に連れて行ってくださいました。ノーネームホームのルーツは、ペコちゃんのレコーディングで組まれたものですが、その後小曽根さんの音楽を追求するユニットとして発展的に再結成され、いま大活躍している皆さんよくご存じのバンド、というよりチームです。今では皆さん家族ぐるみのお仲間になっていて、これもリーダーの小曽根さんの温かいお人柄の表れだと思います。

その欧州ツアーは、小曽根さんが計画されたメンバーのご家族の慰安旅行のようなもの。まずオーストリアのウィーンで公演した後、南仏プロバンスでの公演は有名なラ・ロツク・ダンテロン国際ピアノ音楽祭です。コンサート会場は、森の中の古いお城の広大な庭園。小曽根さんの人気は欧州でも絶大で、以前にも出演されていたそうですが、この時はノーネームを率いての出演でした。フランス各地からやってきた大観衆は、その素晴らしい演奏に脚を踏み鳴らして大喝采でした。

アメリカから呼ばれたのは、チック・コリアバンドで、メンバーはチックさんの他、クリスチャン・マクブライド(☿)さんロイ・ヘインズ(☿)さんケニー・ギャレット(☿)さん。皆さん私とは古くからの知り合いで、滅多に行けない遠い地でお会いでき、私は格別の思いでした。ウィーンでもここでも、クラシック音楽の長い歴史が音楽や生活に息づいていて、絵画も含めて欧州の文化や伝統を肌で感じた、本当に素晴らしい体験でした。

長い間お店をやっても何も財産を残せませんが、こうした体験をはじめ、ミュージシャンたちと知り合ったり遊びに行った楽しい思い出が、今はとても貴重な私の財産です。私からジャズをとったら思い出が全部なくなってしまうほど、ジャズの中で生きている人生だと改めて思います。

来
た
飲
ん
だ
食
べ
た

♪ Struttin' With Some Barbecue

食べ物に関するジャズってあまり思いつかないのですが…この曲はサッチモが奥様と作った楽しい曲。デキシー・ナンバーなのでウチではあまり演奏されません。唯一、私が名付け親になっている《南青山六丁目楽団》セクステットが演奏します。

■来た飲んで食べた

先日「やつぱ小曾根さんて、いいツすねえ」とお店のスタッフがCDを買ってきてお店のBGMでかけていました。見るとジャケットには若き小曾根さんの少年のような顔写真。30年前の最初のスタンダード曲集「Spring Is Here」でした。サイドメンはジョージ・ムラーツさんとロイ・ヘインズさん。

そのジャケットを見ていて思い出したのです。六本木時代のお店のカウンターにジョージ・ムラーツさん(㊟)さんとジム・ホール(㊟)さんが寄り添うように並んで座って飲んでいた姿を奪うようにして取り上げて飲ませなかったことがありました。そうだワ、思い出に残っているミュージシャンのお酒や食事にまつわるエピソードを集めてみます。

サラ・ボーンさんが来日したアフターアワーズに、ウチのお店にこれから来たい、と連絡があった時には、あわてて壁にあった大きなナンシーさんの写真パネルを、皆んなで全部はずしたことがありました。

やってきたサラさんはまず棚をズラ一つと見渡して「あれをちょうだい」お店で一番の高級ブランデーでした。「でもお、それはエディさんのものなんですけど」と言うと「あら

そう、彼に会ったら言うておくわ」なんて軽く意に介せず。エディさんもその頃は新人な
のでした。それがサラさんとの出会い。その夜のウチの出演者はチャリートさんでしたが、
彼女からマイクをとって歌ってくれたのが♪ On A Clear Day でした。

MJQのメンバーは、ミルト・ジャクソン(Milt Jackson)さんはじめ皆さんよくいらっしまし
た。そのベーシストだった故パーシー・ヒースさんと、同じく来日中だった故フィリー・
ジョー・ジョーンズ(Philly Joe Jones)さんがたまたまウチで一緒になった深夜、夜が明けるまでの数時
間に二人で日本酒の1升ビンを空にしました。つまみもなしに。お酒が強いミュージシャ
ンは多いですけど、こんな勢いで飲んでケロツとしてたのがとても印象に残っています。

昔NYに行った時「ラッシュライフ」に出ていた故シダー・ウォルトン(Sidney Bechet)さんにお会
いした時、客席にいた私のところに来て、お酒を飲みに行きませんか、と彼のピアノタツ
チのように優しく誘ってくれました。私の記憶では、そんな風に優雅にお酒を誘ってくれ
た唯一のミュージシャンかもしれません。

食べ物で印象深いのは故フレディ・ハバード(Fred Hubbard)さん。いつもとっても陽気な方で、唯
一モノにした日本語がよほど嬉しかったのか、やってくると、何かというところへんなイント
ネーションで鼻歌交じりに「ワタシはアナタをアイします」が口癖でした。

一度私にご馳走したい、と来日滞在して日本で活動していた黒人女性歌手の家に伺った

ことがあります。そのお料理はアメリカ深南部の、もの凄い激辛の黒人料理で、あまりに辛くて私はほとんど手を付けられませんでした。フレディさんの「おふくろの味」だったのでしょうか、彼は美味しい美味しいと驚くほどガツガツたくさん召し上がりました。

向こうの特に黒人ミュージシャンの大食漢には驚かされます。故ハイラム・ブロックさんはギターリストですが、ブルーノート東京公演が終わると必ず立ち寄られてピアノを弾き語られました。で、終わった後ハイラムさんの熱烈なファンであるウチの常連さんと一緒に有名な焼肉屋さんに行ったことがあります。

注文した焼き肉を三人前くらい食べた後、3キロの肉を特別注文。見てる前で炙^{あぶ}った程度のレア肉をみるみるペロッと平らげました。まるでライオンのようにでした。深夜の3時です、彼らのエネルギーが凄^{すご}いな演奏も納得できました。8年前に訃報を聞いて、あんなにお肉を食べてて身体にいいはずないワ、ととつさに思いました。（喉頭^{こうとう}ガンでしたが）。

ベースのチャーネット・モフェットさん。彼が初めてウチのお店に来た時はまだ少年の面影が残る18歳。お寿司屋さんに連れて行って私が「海老の踊り」をたのんで、生きて動いている海老を見せながら口に入れると、飛び上がってびっくりしてワーワー言いながらお店の外に駆け出していきました。初めて見る恐ろしい光景だったようで、驚きようと言ったらなかったです。私も面白がつて、それ以来やってくる度にお寿司屋さんに連れて行き、

動く海老を彼に差し出しながら踊り食いを見せるのが楽しみになったほどです。

東のガッド（ステイブ・ガッド）西のハービーと言われるほどのドラマー、ハービー・メイソンさんはビバリーヒルズに住んで活躍中ですが、何年かに一度は来日し、ブルーノート東京でやるときは必ず立ち寄ってくれます。そんな時は、私が手羽先肉を大量に買い込んできて家で揚げ、お店に持っていきます。彼はとにかく日本の焼き鳥味付けの手羽先が大好き。こんなに？というくらいお皿に手羽先の山。でもぺろっと平らげます。それも飽きずに、来日中はほとんど毎夜のこと。

同じく日本の味が好きなのがウィナード・ハーパー(⑤)さん。彼はもっぱらうなぎ。うなぎ屋さんのうなぎは高いので、私が用意するのは袋に入っていてタレが別に付いているチンするやつ。彼もペロツと平らげます。それもやってくると必ず飽きずに毎回です。私が大昔、「六本木ジャズビレッジ」の企画でNYにいい新人を探しに行き、来てもらったのが彼の最初の来日で、確か彼が25歳でした。その頃はうなぎなんて知らなかったはず。その後どこかで味を占めたのでしょうかね。

カーメン・マクレエに「彼女こそ本物のジャズ歌手」と言わしめた故ベティ・カーターおばんさんは、大のタコ好き。六本木時代やって来ると、必ず一緒にお寿司屋さんに行きましたが、彼女が板さんにたのものはタコばっか。他のものをたのんで食べてた記憶があり

ません。「自分の息子より若いミュージシャンと仕事をしていて、若いエネルギーを感じるのがとても好き。私が若い頃感じたことを、今彼らが感じるのがわかるから」と言つてたことが、老境の今、共感とともに思い出されます。

スポーツはじめいろんな分野で、米国と日本の実力差のことをよく言われます。体力の差だとか国民性の違いだとか。よくわかりませんが、お店をやつていて向こうのミュージシャンたちと接していると、基礎エネルギーの差をお酒や食事から実感します。

六本木時代の初期、立花保子さんがピアノの弾き語りをしていた頃。いつも銀座で酔つ払つてウチの店にやってくると必ず『The Days Of Wine And Roses (酒と薔薇の日々)』をリクエストして、それを聴くまではご機嫌斜めで帰らない、そんなお客さまがいました。

当時はワインブームのはるか前で、高いワインをしこたま飲んでお金を落としていく、ありがたい常連さんで、私達は「サケバラおじさん」とあだ名をつけていました。この方にとつてウチは「ジャズクラブ」というより、単にジャズをやっている「クラブ」でした。

ちなみに私の中では今、「ライブハウス」と「ジャズクラブ」は区別されています。もっぱらライブ音楽を提供する場所(貸し小屋を含めて)がライブハウス、お食事や美味しいお酒を提供しながら本格的ジャズをしつかり聴いていただくのがジャズクラブ。NYでは、まあ食事が本格的かどうかは別にして「ジャズクラブ」。ライブハウスとは別です。

コンサート会場ではありません、演奏者とお客さまが身近に接する空間です。BGMだったり逆に簡単なスナックではなく、おいしいお酒とお料理でくつろいで、そうしてジャズをご堪能いただきたいのです。バブルがはじけて経営が苦しくなっただけからと、美味しい食事にこだわってきた今「腕のいいシェフのいるジャズクラブ」をウチのキャッチフレーズにしています。人生、酒ばかりではないけない、薔薇ばかりでもよろしくない。

ついでに「シンガー」と「ボーカリスト」。バンドの一員として「声という楽器担当」として使われるのがボーカリスト。ピアニストとかベーシストとか言うように。ソロで活動する時はシンガー、だと聞きました。（私の知識はほとんどミュージシャンやジャズ通からの耳学問）厳密にはそうらしいですが、私は特に区別していません、気分です使っています。

㋎章タイトル補足

《南青山六丁目楽団》はテナーサックス、トロンボーン、ユーフォニアムという中低域楽器だけの三管フロントで、ジャズ・コンボとしては他にない編成だと思います。たまたまメンバーが見つからず私が組んだのがきっかけですが、柔らかな音のするジャズが素敵で大好評。ウチの「専属バンド」として年に何回か出演します。CDもあります。世界的にユニークな編成とサウンドだと思ったのでユニット名もユニークに、と名付けたのですが……ちよっとローカルすぎたかしら。

あれやこれや

♪ All That Jazz

ミュージカル「シカゴ」の中で歌い踊られる曲。その演出振り付け師、ボブ・フォッシーの自伝的ミュージカル映画のタイトルも「All That Jazz」です。ミュージカルの初上演は1975年、ウチのお店が誕生した翌年。

「全てがジャズ」私の40年のようだ、と思ってバイリンガルの方に聞いたら「何でもあり」という意味なんだそうです。この章では、どっちの意味にとられてもいいかしら。

ボブ・フォッシーと言えば…彼が監督したライザ・ミネリの「キャバレー」を見て、大泣きして目が腫れて、しばらく映画館から出て来られなかった若い日のことを、ついでに思い出しました。

■あれやこれや

最近はその日の演奏が終わると、お客さまは皆さん終電に間に合うようにとサッと帰られます。演奏者もサラッと帰られます。昔は、お客さまともども飲みながら話し込んだりして、ステージが終わってからの方が長いほど明け方までお店を開けて。終電前に終えるなんてありませんでした。とりわけリーマンショック以降は、特にウチは多かった外人客も減り、お店も人々も価値観もライフスタイルも大きく変わったことを日々実感します。

お店にやってくる来日ミュージシャンの演奏が聴かれたり、エピソードも多くはそんな深夜の時間帯、ステージが終わってからが多いですね。思い出すことが脈略なくコマ切れに出てきて、タイトルも少々ケクソ気味で恐縮ですが、ランダムに書いてみます。

最近の若いジャズメンは、大学などでしっかり基礎を勉強されていますから複数の楽器を演奏できる人も多くなりました。ニコラス・ペイントさんはトランペッターですが、ピアノ、ベース、ドラム…楽器は何でもござれ。来日すると必ずアフター・アワーズにウチ（南青山店）にやって来るといきなりピアノの前に座り弾き語ります。それも1週間連続で毎夜のこと。お客さまが誰も居なくても終わることなく延々です。最近は来日していませんが、さすがにその1週間はスタッフも私も心のなかでは「もう止めてくれないかしら」。

故ミシェル・ペトルチアーニ(㉔)さん、ルー・タバキン(㉕)さん(秋吉敏子さんの旦那様)も、お客さまが居ようが居まいが演奏し続けて終わらない演奏者でした。今ウチに出てくる来日ミュージシャンの多くをプロモートしている川上さんが若き日、身体の悪いミ歇尔さんをどこへ行くにも抱きかかえて：終わらない演奏にさぞ大変だったろうと思います。印象深いのがパット・メセニーさん(㉖)。来日公演の時、公演前に一度弾いておきたいからと鯉沼さん(多くの海外のミュージシャンを招請されたプロモーター鯉沼ミュージック社長)とやってきて、ウチのトリオをバックにシットインで演奏されました。当時お店は引越して間もない北青山店。演奏が終わるとすぐ、お店の前の紀ノ国屋の駐車場の空き地に行って、コーラを飲みながら一人黙々と長い時間ギターを弾いておられました。

ドラムを叩く小曽根真さん、なんて想像できないでしょ。南青山店のある夜のこと。マーカス・ミラー(㉗)さんがやってきた時、たまたま小曽根さんがいてトリオ演奏をされたんですよ。もうひとりのトリオ・メンバーは故マイケル・ブレッカーさん。ブレッカーさんはウチの何周年目かのイベントでも出演されたテナー・サククス奏者で、ピアノも弾くことはよく知られています。でもこの時はベースを弾いて、マーカスさんがピアノです。この豪華メンバーによる斬新な「セミプロトリオ」それぞれ専門外の楽器ですが、さすが世界の一流たちは違います。リハーサルすれば明日にもコンサートができるような立派

なトリオサウンド。小曽根さんも、ドラマーになつてもきつと一流になられたと思われるそんな叩きっぷり。ノッてきた三人は専門外の楽器に次々交替して演奏され、残っていたお客さまたちにヤンヤの喝采を浴びていました。腕もさることながら、小曽根さんは音楽を作り上げるリーダー&演出家として、とりわけて秀でていると思います。

話は前後しますが、新宿から六本木に引越して、小さなスペースで弾き語りのお店をはじめてライブ演奏が本格化していく頃、まだ学生だったピアノリストが、明日はバークリーに旅立つ、という前の晩にやってきて、ここで日本の弾き納めをして行く、とピアノを弾きました。10年ほどして日本に帰ってくると、彼は世界的なピアノリストになっていました。小曽根真さんです。

今はクラシック畑でも大活躍されていて、例えば前日は北欧に居たかと思うと、翌日はNY。ロスで公演し成田に寄ったと思つたら香港からツイート：なんてことがしょっちゅう。世界中どこでも大きなコンサートホールチケットが即ソールドアウト。こんな人は今ほとんどいません。そんな彼が、こんな小さなジャズクラブに出演してくれることなどあり得ないのですが、年に何度か、超々多忙の中、ウチに手弁当で出演を申し出てくださつてお店の窮状を助けてくださいます。30周年には4日間、このあいだの40周年のイベントにも3日間も出演してくださったのも、その時からのご縁と彼の温かいお人柄ゆえです。

小曽根さんは「ノーネームホース」というバンドを率いていますが、参加しているミュージシャンの多くがウチにもよく出ています。メンバーの一人が出演していると、超多忙の中、時間が空いたからとフラリと聴きにいらしたり弾かれたりもされます。時々は奥様と連れ立って…本当に素敵なおしどり夫婦です。(奥様は女優の神野三鈴さんです)。

無名時代にウチに出ていて、その後メジャーになった多くのミュージシャンを身近に見てきました。ちょっとメジャーになったらそれつきり縁が遠くなった、なんていう人もいるのがこの世界。そんな中であって抜きん出て違うのが小曽根さんです。超一流になられる方は人間的にも尊敬でき、本当に違うといつも私は頭が下がrippばなしです。

小曽根さんはいずれグラミーを獲られると思います(ノミネートされるだけでも凄いのに、それはもう経験済み)。そして、彼の率いるノーネームホースがカーネギー・ホールを連日、満席にする日が来るに違いありません。早くこのお店の蓄まった借金を返して、グラミー賞の会場でその晴れ姿を見ること…これが私のジャズ人生最後の、今の夢です。

私は、長年ライブの現場でジャズを聴いてきてこんなイメージを持っています。ジャズコンボのサウンドを支えるのがベースとドラムスのリズム隊。その土台に乗って音楽を構築するのがピアノであり管や弦のフロント楽器。そうしてその土台をどんな作りにして支えるかがドラムスの仕事。つまり、音楽全体を演出するのがドラマー。しゃしゃり出て

主張するのはドラムスの仕事ではありません。少なくとも私は好きではありません。

ジャズは演奏の自由度が高い音楽ですが、とりわけドラム譜はキチンとした旋律の譜面があるわけではなく、叩くパートと基本のリズムがあるだけ。演出力の基本はドラマーのセンスです。だからとりわけドラマーはたくさん曲を知ることが求められます。

ボーカリストがいる場合は、ピアノがドラムスにかわって演出役になると思いますが、いずれにしろリズム隊がいいと、その上に乗った奏者もボーカルも自由に羽ばたけます。マイルスの音楽を聴くと、とにかくリズム隊が素晴らしいから（もちろんそれも彼が作り上げているのですが）彼が自由に奔放に羽ばたけるのだと思います。

同じことをピアニストとしてやっているのが、小曽根さんなのだと感じます。最近クラシックの世界でも大活躍されていて、ジャズとクラシックを融合する創造的な仕事に挑戦されています。昨年（2014年）の2月、ニューヨーク・フィルとのジョイントコンサートの日公演の後、指揮者で現在のNYフィルを大成功に導いているアラン・ギルバートさんをドラマーに起用して、ウチのお店で演奏してくださいましたことがあります。

30数年ぶりに叩くアランさんのドラムさえ、素晴らしい「土台」として小曽根さんの演出がコンボサウンドを作り上げてしまします。その時に小曽根さんが言った言葉。「今はまだ初級者として叩いているけど、そのうちもっと上達したら僕の思いを超えて、前面に

出て好きなように叩きはじめるに違いない。そうするとやりにくいけどなあ……」。

トランペッター、ロイ・ハーグロブさんにもその演出力を感じます。多くのジャズレジェンドに信頼され、共演歴が多いことでも知られていますが、彼の率いるバンドでは、要のところでピシッと吹くサウンドがもの凄くカッコイイのです。

彼は六本木時代から私を日本のお母さんのように慕ってくれて、いろいろ相談してくれます。ずっと腎臓を悪くして来日公演でも2、3日おきに透析をしなければならぬお身体なのですが、ブルーノート東京に出ている時は、ほんの僅かな休憩時間でも暇ができてフラッとウチに来てカウンターに座り、演奏を聴いてまたすぐ帰っていかれます。

いつもビシッとスーツと蝶ネクタイに身を包んで（ラフな服装の彼を見たことがあります）あの細身の身体に合うスーツがNYにもなくて、日本に來ると「109」の細身専門スーツ売り場で何着も揃えていかれます。

このあいだはツアー前日にやってきて、地方の病院が心配で行きたくない、と本音を吐露されて。私が、日本の病院は地方でも信頼できるからとハグしてあげると安心されたようでした。その時には元気のなさそうな身体で1曲吹いていかれました。先日NYから来たミュージシャンが、ロイによりしくと言付ことずかった、とやって来ました。腎臓を手術されたそうで弱っているみたい。顔色も悪くなってたし……これは今の私の一番の心配ごとです。

♪ 追記

ウチのお店の常連さんの中には、私以上に本当にジャズ好きで、まさにジャズとともに生きている方が何人かいらっしゃいます。今はお仕事をリタイアされたKさんは、特にインストジャズの日にはほとんど連日いらして（ちなみにウチでは、ボーカルファンとインストファンの客層は明確に分かれています）克明にメモされながら聴かれます。彼は自分のブログページを持つてジャズのことを書いているブロガーではありません。その曲にまつわる話や思い出などと併せて、感想をご自分の日記に書いているんだそうです。他人に読ませたいのではなくあくまでご自分の勉強として、だそうです。

塾の教師をなさっているNさんは、イベントなどのスペシャル企画、特に小曽根さんの時には、その様子を詳細なドキュメントタッチで文章にされて、さまざまな参考資料や写真とともに構成されたファイルを複数冊手作りして、出演者や私に送ってくださいます。ジャズファンとして小曽根真ファンとして、その熱意には頭が下がります。

この本を綴っていて何か資料になるものを……と書類の奥をかき回していたら、そのNさんにいただいた2005年の30周年記念の「小曽根真 4Days」と40周年（去年）のファイル「小曽根真 3Days」そして、この章で書いたアランさんとの「小曽根真特別企画」のファイルが出てきました。Nさんのファイルに転載された私自身のレポートを引用します。

2014年2月16日

私のレポート・ブログより

再びのドカ雪で東横線も湘南新宿線も運行停止している中、やっとの思いで、みなとみらいホールで行われたNYフィルと小曽根真さんのジョイントコンサートに行ってきました。

170年の歴史を持つNYフィルは、さまざまな国から優秀な音楽家が集まっていますが、100年来ニューヨークが音楽監督になったことはなかったそうです。でも今の音楽監督アラン・ギルバートさんはニューヨーク。お母様は日本人、しかも今NYフィルの現役ヴァイオリニスト（建部洋子さん）。そのアランさんで現在、大成功を収めています。

第一部は「ラウスの狂気」ガーシュウインのラプソディ・イン・ブルー。小曽根さんのピアノがオーケストラにピタッと合致して、その美しいこと、素晴らしいこと！私は感動で自然に涙がこぼれ落ちてどうしようもないほどでした。お隣の女性も、同じように涙が抑えきれないようでした。

終わっても何回も拍手が止まず、小曽根さんがアンコールに応えてブルースをひき始めると、ベースとトロンボーンの方、最後にはサククスの方まで出て来て：お客さまは手拍子を打って、ヤンヤの大喝采でした。

第二部チャイコフスキーの交響曲第5番短調。美しくて厚みのあるハーモニーが心地よく聴こえて、幸せな気持が私の疲れた身体をやさしく包み込んでくれるようでした。終演後

楽屋にご挨拶に伺って小曽根さんのお顔を見たら、さっきの感動がよみがえって、涙がこぼれそうになってしまいました。感動覚めやらぬまま、お店に向かいました。

翌日2月17日

私のレポート・ブログより

多くの皆さんが待ちに待った【Sunday Special 特別企画】小曽根真(まこと)さんとノーネームホーセスのお仲間、中村健吾(けんご)近藤和彦(わひこ)奥村晶(あき)さん、そしてとてつもないハプニングドラマーが参加されました!「世界の小曽根」さんをこんなに身近に聴けるなんて驚きなのに、さらなるハプニングです。

前日の、みなとみらいで行われたコンサートのご報告で私が紹介した、ニューヨーク・フィル・ハーモニーの指揮者アラン・ギルバートさん! (実は私は少し前に小曽根さんから伺っていたのですがお忍び演奏なので公にできず、それより何より小曽根さんのハプニングへの粋な遊び心だと思います)

その小曽根さんのメンバー紹介の仕方はとても愉快でした。この方が今夜ジャズデビューするアランさんです、時々クラシックもやっています…だなんて。(いつも思うのですが、小曽根さんはホントに笑いを取るのもプロ以上の一流ですね)

アランさんはその昔ジャズも大好きでドラムを叩いていて、NYでのジョイント公演の時、

飲んで話しているうち意気投合、これを機会にデビュー、と話が決まったらいいのです。でも話が急なうえ、何しろ35〜6年ぶりに握るスティック。アランさんも猛勉強されたそうですが、日本人の血を引いているせいでしょうか、とてもシャイな方で、遠慮ぎみに一生懸命演奏されていました。

でも、さすがNYフィルのコンダクターです。ピアノの音や全体の音がよく聴こえている心憎いばかりのツボをとらえたプレイぶりで、汚い音が全くなく、しかもよくスウィングしこれは今後ジャズの世界でも本格的に大物になりそうな感じ。小曽根さんも、これからジャズとクラシックの融合した全く新しい音楽を二人で追求する、その記念すべき第一夜です、とMCで抱負をお話しされていました。

小曽根さんの演奏については、多くを語る必要がないほど素晴らしいに尽きますが、健吾さん、近藤さん、奥村さんも小曽根さんのリードで普段より一段と冴え渡りシビれるほど素晴らしい！満々席のお客さまもノリにノって掛け声やら歓声が絶えず、大賑わいでした。

レ ク イ エ ム

♪ After You've Gone

「君去りしのち」。かなり古いスタンダード・ナンバーで、ウチにいらした故ベティー・カーターおばさん、故サラ・ボーンさんら多くの歌手や奏者にカバーされています。

これまでお知り合いになった多くの方の名に「故」をつけなくてはいけないことに、改めて気づかされました。

■レクイエム

これを書いている時にプーさん（NY在住ピアニスト菊地雅章）の訃報が届きました。最近は何報に接する機会が増えました。長く生きるということは、よりたくさんのお別れを経験しなければならない、ということと引き換えかもしれません。何だか私ばかりが長生きしてるようで…。彼らの思い出話を書くことは、そんな私の責務かもしれないと思い、この章を綴ることにしました。

最近「美人皇族」秋篠宮佳子さまがニュースを賑わしていますね。それで思い出しました。今年春でしたか高円宮典子様のご婚約され、そのニュースを見ていて私は、彼女のご両親を思わずにいられませんでした。亡くなられた高円宮様とお妃様は、ウチのお店（今の青山店）にSPもつけずお忍びで何回かいらしてくださいました。お酒が大好きで、いらした時はソファ席に着かれて深夜3時過ぎまで飲んでおられました。

当時はNHKにお勤めでしたが、物腰から何からそれはそれは上品で、でも偉ぶらずとも気さくに私とも親しくお話ししてくださって、本当に素敵なカップルでした。生まれ育ちから皇族の方というのは「皇族オーラ」が出ているのでしょうか、私がこれまで接してきたVIPの中でも群を抜いて違っていました。

日本では少ないですが、外国のVIPの方にはジャズの好きな方が多いです。お忍びという表現が当てはまるかわかりませんが、アマコスト元駐日大使もそんなお一人です。(成り行きでここに登場しましたが、アマコストさんはご健在です。お間違えなく)。

アマコスト(マイケル・アマコスト)さんは外交官で、レーガン政権の時はフィリピン大使でした。彼の息子さんが今サックス奏者として活躍中のティム・アマコストさんです。ティムさんが学生の時に早大に留学されていて、腕はまだまだでしたが時々ウチにやってきて飛び入りで吹いていました。その息子さんに会いに、フィリピンから日本に遊びにきたのがアマコストさんがウチに來た最初です。翌年、クリントン政権になるとすぐ日本大使となつて赴任されました。

クリントン元大統領もジャズが好きだったようですが(クリントン政権にはジャズ好きが多かったと聞きました)アマコストさんも大好きで、それから息子さんとは関係なくしょっちゅうお忍びでいらっしゃるようになりました。それがご縁で「アメリカ大使館公認遊興施設」として認められてからは、米国大使館の方たちが大勢いらっしゃるようになります。外国人のお客さまもそれまで以上に多くなりました。

南青山店になつてから(小ブッシュ共和国党政権になつてからです)ジョンさんという米国外大使館の方と一緒にいらしていた体格のいい方がいました。しょっちゅう米国と日本を

往復^{いき}きされて、帰ってくると思うとお土産をもつてウチのお店にやって来て、根っからのジャズ好きで、「ブラボー」なんて声を上げて陽気に楽しみお食事をされ、高価なワインを開け……私は「ジョンちゃん」なんてハグしたり片言日本語でお話ししたり……。何をやっている方かしら、と思っていたとてもいいお客さまでした。

5、6年経ったある夜、大使館の方がいらして（彼女も時々連れ立っていらしてました）そのジョンさんが心臓病で急逝されたと知らせてくれました。享年60。そう言えば心臓の手術をしたことがある、とおっしゃっていました。その1週間後くらいでしたか、朝日新聞に「日米関係に大きな損失」というヘッドラインで大きく取り上げられていたのです。（彼の死は、いろんな新聞にも大きく取り上げられていました）。

その記事によると、彼はDCでは有名な大統領補佐官で（大使館員どころかもっと上の方だったと後に大使館の方から伺いました）彼が日米関係の重要事項の基本方針をほとんど決めていたブッシュ政権の影の大物だった、というのです。えっ、あのジョンちゃんが？ そんな偉い人だったの？

その記事の中に、最初彼は日本が好きではなかったが、なぜか途中あるときから親日家になって、日米関係をいい方向に導いたとありました。私は密かに、ウチのお店も日米関係の改善にすこし貢献したのかしら、なんて思わずにいられませんでした。

アメリカの大統領はクリスマスになると毎年「オーナメント」を出します。ドアなどに飾る小さなグッズで、恒例のクリスマス・プレゼントなんだそうです。毎年テーマと形状やデザインが違い、大統領の好み色が濃く表れている豪華なものです。はじめはジョンさんがお土産にくれたそのオーナメント、お亡くなりになってから今も、ジョンさんの部下の方が持つてきてくださるようになりました。今それは15個になり、暮れになると我が家の玄関を飾ります。私は毎年、ジョンさんの面影を偲^{しの}びながらそのデザインの違いを楽しみにするようになりました。

世界を動かす超大国アメリカの大使館との関係が少し影響しているかもしれませんが、今、オランダ、イタリア、カナダ、トルコ、イスラエル…多くの大使館の方がいらっしゃいますが、個人的に来てくださった最初の大使館VIPがアマコストさんでした。

かつて、イタリア大使館の高官でウチによくいらしていたマルチェロさんという方がいました。奥様がプロの写真家で、お二人とも映画スターのようにスマートで若くカッコいい素敵なご夫妻でした。時々ご自宅でホームパーティーをされ、招かれてピアノリストや常連さんを連れてお邪魔しました。四谷にあった上級職員用の、素敵な一軒家。広い居間にはグラランドピアノがあつて、マルチェロさんがベースを弾かれてジャズが演奏され、美味しいイタリアワインで夜が更けました。

今のお店のステージ対面、トイレに行く通路のところに鉄扉が埋めてあります。初めて訪れたお客さまで、そのドアの取手をグイと引いてから、そのドアが壁に埋め込まれていることを知って、あれつとバツが悪そうにして通りすぎる方も少なくありません。

そのドアには、さまざまな名前が落書きのようにところ狭しと描かれています。六本木時代にウチに立ち寄って演奏されていたミュージシャンが残していたサインで、多くのサインを読み取ることができます。埋め込まれて見ることができないその鉄扉の裏側には、トランペットを手にするマイルスの、アーティスティックな素晴らしいアングルの写真がコーティングされています。等身大より大きい写真です。六本木時代はウチのお店に入る時は、そのマイルスの姿をグイッと引いて（かなり重い鉄扉です）中に入ったのです。

その写真の撮影者が、マルチェロさんの奥様でした。六本木時代にお店を改装する際、私がマイルスが大好きだというと「私の写真の中に近くで撮りたいのがあるから使って」とネガを貸してくださったのです。マルチェロさんご夫妻はその後任期を終え、本国に帰られてから、ぜひイタリアに来て欲しいと何度も誘われました。が、とうとう実現できませんでした。10年ほど前、マルチェロさんがお亡くなりになった噂を耳にしました。まだお若かったのに…。

特に昔のジャズ業界に生きたミュージシャンは、私生活の面では一般の人に比べて奔放

に生きた方が多く、残されたご家族は大変です。差し障りないところを少し。

ピアノリスト菅野光亮さん。松本清張の「砂の器」の映画音楽をはじめテレビドラマの作曲などで活躍された方ですが、私は美しい旋律の彼の曲が大好きでした。「ひまわり」もレパートリーで時々弾いてくれました。彼が弾く度に私はソフィア・ローレンの映画を思い出して涙腺を刺激されたものです。私より2つほど歳上で若くしてお亡くなりになりましたが、やはりお酒の飲み過ぎだったと思います。とにかくお酒が大好きでした。

彼が亡くなった晩、奥様からとりあえず私に電話がかかってきて、その場に居合わせたミュージシャン数人とご自宅に駆けつけました。当時はお通夜は自宅で行うのが一般的で徹夜で朝までお通夜をやって、翌々日あたりにお葬式という段取りでした。皆さんで準備を始めて一段落し、さて、お酒ありますかと奥様に伺うと、ウイスキーならあります、と出してくれました。

で、皆さんで少しただこうと開けて飲むと…エッ何これ？ただの水ではありませんか。「あらいやだ、でもこちらにたくさんありますから」と奥様が押入れから出した箱の中にはバランタインが10数本（ケース買いましたようです）。開けてみると、全部のボトルの中身が全てただの水！夜中に譜面を書きながら飲んで、奥様にバレないように水を詰めてあったらしいのです。

飲酒運転にも今ほど厳しくなかった時代。ほとんどの出演者がクルマでやってきて路上駐車し、平気で飲んでいました。お酒好きの故上野尊子さんなどはかなり酔っ払って運転して帰る夜がしょっちゅう。ダイジョブダイジョウブと言って聞かず、私を無理やり乗せて送ってくれましたが、酒気帯びというより完璧な酒酔い運転。お店を閉めた後も皆んなで出かけて朝まで飲んだり食べたり踊ったり…ま、私が歳をとって体力がなくなっただけかもしれませんが、世の中もミュージシャンのライフスタイルも様変わりしました。

トコちゃん（故日野元彦）がNYから帰ってきた頃。彼はシモネタさえ明るく話してくれるピュアで憎めない可愛い人で「京子さん今日も叩いていい？」なんて感じで毎晩のように来て飛び入りしていました。そうしてウチで叩いては、六本木通りを挟んで対面にあつた「アルフィー」に立ち寄って帰っていくのが日課でした。そのうちに、暫く来ないけどどうしたのかしら…とっていると「京子さん、ボク結婚したよッ」お相手は、今のアルフィーのオーナー容子さんでした。

日本ジャズ界の親方さま（故ジョージ川口さん。私達は、こう呼んでいました。「お館さま」やめた）かもしれません）ステイプ・ガッドさんがやって来た時のこと。どうしたわけかお客さまが誰もいなくなり、身内ばかりの夜更けになりました。山ちゃん（山本剛）とステイプさんが演奏しはじめると、我らが親方さまは真ん前の席に陣取ってジーンツと聴き入って

いました。そして「ウン、たいへんすばらしい」と大拍手。その朝方に帰った日の、若きペコちゃんのステージにも親方さまはちゃんといらしていました。

親分肌のおちやめな可愛い方で、あの年代の大御所^{おおごしよ}なのに素直で、新人だろうとベテランだろうと、いいものはいいダメなものはダメとはつきり言う、そんな親方さまが私は大好きでした。南青山店になってからもよくいらつしやってドラムの前に座られました。そのキャラのように、とにかく明るいドラムサウンドも私は好きでした。大晦日にはご高齢を押して必ずやつてきて、親方さまの音頭でカウントダウンするのが十数年間も恒例でした。そういえば、世の中の年中行事がすっかり味気なくなつて来ているのは、お年とりやお正月に限りませんが、大晦日のオールナイト・セッションの雰囲気も、特に最近時代の移り変わりを感じます。ウチが「大晦日ライブ」をやり始めた昔は、大晦日はどこもお店を閉めていて、ライブジャズとともに新年を迎えるお店は少なく、その意味ではウチはカウントダウン・セッションの先駆けかもしれません。

当時は、特に出演メンバーを決めてステージを開くのではなく、お年取りを済ませたミュージシャンたちが、三々五々ほろ酔い気分でどこからともなく集まつてきて、入れ替わり立ち代わり本当のジャム・セッションが繰り広げられていました。いわばミュージシャンたちの忘年会。お客さまも、立ち寄つてジャズを聴いてから初詣に……そんな感じでした。

当店は今年41周年ですが、ウチの大晦日オールナイト・セッションも同じくらいの歴史があるわけです。ちなみに、5月の子供の日に恒例になった「キッズ・ジャズ」も、ウチが始めた7年前はほとんど初めての試みでした。でもすぐに他のお店やイベント等が組まれるようになって…情報化社会になって、独自性を保つのが難しいご時世です。

作家やジャーナリストの方もジャズの好きな方が結構いらっしました。故色川武太さん、故川上宗薫さん、故天野祐吉さん、故筑紫哲也さん、故料治直矢さん。料治さんがお元気な頃はTBS報道部の方々がよくいらしてました。現在出ていて時々来られる方は差し障りがあるので書きませんが、テレビのニュースなどで毎日見ている方がいらっしやると、ずっと以前から知り合いだったように錯覚してつい馴れ馴れしくなってしまう。

筑紫さんは、とにかく幅広いご趣味だったようで、ジャズに限らずお芝居やダンスなどいろんな場所でよくお見かけしました。とても気さくな方で、遠くから「筑紫さん」と叫ぶとニコニコして「やあやあ」と偉ぶらずいつも手を振ってくれた姿が忘れられません。

色川さんとよく一緒にいらしていたのが川上宗薫さんですが、その後ご病気になられ、私の旧自宅の近くの病院に入院されました。私は、買い物帰りの日課のようにしょっちゅうお見舞いに行つて、枕元で奥様と一緒によくお話ししていましたが、入院して1ヶ月ほどでお亡くなりになりました。亡くなられた日は日曜日で仕出し屋さんがお休み。ご自宅

にご遺体と帰って、たくさんのお通夜の料理を奥様と一緒に作ったことが思い出されます。六本木から北青山に引っ越してきて、まだ真新しいお店で営業しはじめて、すぐマイルス・デイヴィスが亡くなりました。その時「忌中」と書いて、道に面したお店のドアに彼を悼^{いた}んで写真を貼ったこともよく覚えています。

これまで多くのジャズ・ジャイアンツが亡くなっていますが、そんなふうに忌中を掲示したのはマイルスだけ。NYの「ボトムライン」で私の席のすぐ傍に立ってステージを聴いていらしたのですが、オーラが凄くて……彼だけは身近に接したことはありません。「マイルスはジャズではない、マイルスというジャンルの音楽だ」と言われますが、私にとつてまさしく「帝王」。人を寄せ付けない雲上人で、来日しても出歩くこともなかったようです。夜の首都高を、大きく窓を開けてカーステレオのポリュームを一杯あげて、マイルスのジャズを流して走ってみてください。このハイテク大都会に似合うカッコ良さは、隣を走るフェラーリにだって負けませんよ。今でも。

いま南青山店、お店の入り口にはマイルスのパネルがあります。新宿の老舗ジャズ喫茶「DIG」「DUG」のオーナーで、ジャズ写真家の第一人者としても名高い中平穂積さんからいただいたものです。好きなアルバムを聞かれると、マイルスの「スケッチ・オブ・スペイン」をあげます。マイルスは私のヒーロー、亡くなってなお「私の永遠の恋人」です。

7 追記

NY在住の孤高のピアニスト、菊地雅章さん、通称プーさん。日野皓正さんと一緒に時期に渡米しそれ以来、ずっとNYで活躍されてきました。私は40年以上前に彼が渡米する前からの付き合いで、根室の流水ジャズフェスにも、岡山の（山本剛さんのファンの方とは別の方）の個人コンサートにも一緒に行ったことがあります。

ウチが南青山店になってからは、日本には実家もすでになく、来日時はホテル住まいでウチを日本での実家のように拠点にしておられました。昼間は練習でウチのピアノを弾き、深夜残っていたお客さまにソロピアノを弾いたり、朋友、皓正さんとのデュオで出演してください：墨絵を見るような独自のタッチと世界を持つピアノでした。合掌

書き終わって推敲もほぼ済んで（今日は8月15日です）、さあ資料を片付けなくっちゃ。引き出しの奥からひっぱり出して散らかっていた、伝票類の入った紙の束をまとめ始めました。すると、ごっちゃになった紙の束から古い新聞の1ページが落ちました。あらやだ、こんなところからまた出てきた。記事の中の私の写真が目に残りました。

記事は2005年10月6日付け。忘れていた過去ネタなどが書かれていたら、今さら書き加えるのもメンドイしなあ、と思いながら記事を読み終えました。署名記事でライター

は枝川となっています。そう言えば10年ほど前、とりとめない私の雑談話を丁寧に書き起こして記事にしてくれた年配の方の、とっても優しい笑顔が脳裏に浮かびました。今どうしているかしら…ノンフィクション作家だから、きっとホームページがあるに違いない。さっそく検索してみました。

すぐ出てきました。で、見ると…2014年8月15日没となっています。あら今日がちょうど一周忌じゃない！…こんな偶然もあるんですね。「僕の記事も載せる」と言ってるのかしら…。このレクイエムの章に彼の書いた記事を付け足すことにしました。

ミュージシャンが集うBODY&SOUL

読売新聞2005年10月6日付け

南青山・骨董通り。昔は渋谷から六本木に抜ける都電が走り、骨董店が多かったという。

いまは、高級ブティックやレストランが脇道にも並ぶ。この通りの裏手、闇の中に「BODY&SOUL」の赤いネオンが浮かんでいる。ここは、海外のミュージシャンたちがステージを離れた後によく訪ねてくるジャズクラフである。きょうは、ジャズが「滅茶苦茶好きなオーナー、関京子さん（64）の「私の東京物語」に耳を傾けよう。

ジャズと生きてきたのよ(談)

14年前ここにオープンした時は、周りがお屋敷ばかりだった。こんなところにジャズのライブハウスがあるわけないって、お客さんが途中まで来て帰ってしまったり、道がわからなくて電話をかけてくる人を迎えに行ったり、もう大変。それがいまはすっかりビルの街になった。私が新宿でジャズライブのはしりの店を始めたのは40数年前、22〜3の時だった。冷房のない4階の屋根裏部屋で、暑い日には窓を開け放したうえ、部屋の真ん中に氷柱を立てた。新宿から六本木へ移ったの。朝まで店やってた。外国のミュージシャンが遊びに来て、飛び入りで参加するようになったのは、このころから。私のジャズ好きが、彼らはわかるのね。だって、私はジャズと一緒に育ったようなもの。

生まれは中野。父がミキサー(音響技師)していたので、小学生の時から、神田にあったラジオの録音スタジオへついて行って、片隅ですっと聴いていた。家ではFEN(AFNⅡ現米軍放送網)ばかり、気に入った曲になると、畳の上で踊ってたわ。

踊りが好きだから、SKD(松竹歌劇団)に入ったけど、じめじめした女の社会が嫌いで、やめてしまった。その後はジャズ喫茶に入り浸りだった。そんなわけで耳を思い切り鍛えら

れた。耳が命ね。だから、いまでも大好きなジャズで生きてられるのよ。お金には苦労する。ジャズクラブなんか捨てようかと何度もあった。でもひょっとといい演奏を聴くと、はあーやっぱいいなあって。私、少し頭どうかしてるかな。

いまの南青山へは、六本木のBODYSOULが地上げに遭い、居られなくなって流れてきた。東京はほんと変わった。ウチも女性客がぐんと増えたし。イケメンの若いミュージシャンが出る日には女性で埋まる。それもほとんどが「ぶつうのOL」風。私が10代のころは同世代でジャズ聴く人なんて他に全然いなかったのに。

私は相変わらずよ。ブッキング（出演契約）も、厨房で皿洗いもする。先日コックさんが休暇のとき、従業員の食事をつくった。ピーマンの肉詰めとエビフライね。これから？

とりあえず年金もらえる年だから手続きに行かなくては。だけど、それだけじゃ食べられない。こつこつ働いていくだろうな。疲れた、もうやめたいと言いながら。それである日、音楽たっぷり聴いて、お疲れさまであって家に帰り、寝たらそれっきり起きてこなかったことになるのが、いちばんいいんだけど。

（ノンフィクション作家 枝川公一）

内輪の話

♪ Things Ain't What They Used To Be

エリントン・ナンバー「昔は良かったね」…なんてことさう言うことでもないのですが、昔は少々暴風雨や雪には影響なくお店は賑わったように思います。事前情報が多くなりすぎたこともあります、特に若い方のライフスタイルが、今大きく様変わりしていることを実感します。

「水商売殺すにゃ刃物はいらぬ、雨の三日も降れば良い」…この頃はジョークではなくなってきました。

■内輪の話

先日、本当に何十年ぶりかでドラマーの佐藤節雄さんから、今度リーダートリオでアルバムを出すから発売ライブをしたい、とご連絡いただきました。佐藤さんはウチが六本木でお店を始めたころ、毎週金曜日に深夜セッションをやっていて、その時出演していた方で、今もどこかで演奏されているお噂は耳にしましたが、ずっと疎遠でした。

コンピュータの時代になり、最近はSNS（ソーシャル・ネットワーク）が盛んになってスマホを利用される方も多くなり、特にこれまでコンピュータと無縁だった年配のミュージシャンから突然の連絡、というケースも増えました。実は佐藤さんの奥様は、六本木で始めた何年かウチのスタッフでした。ちょうどこの本を書くために記憶を掘り起こしている時で、スタッフのことなど内輪のことも書かなくっちゃ、と思っていたところ。

御巢鷹山に墜落した日航機の30回忌で思い出した、と十何年ぶりに電話がかかってきました。六本木ではじめて頃のスタッフで、お店のチーママ的な存在だった羽鳥靖子さんです。ちょうど物置から「発掘」した写真を見ていて、そう言えばどうしているかしら、と思っただけでしたからビックリ。事故の日は六本木のお店が改装開店した翌々日でした。彼女は、里吉しげみさんと奥様の水森亜土さんの劇団「未来劇場」の劇団員で、亜土さんもよく

いらしてました。亜土さんのあの舌足らずの独特のキャラはあくまで表向き。本当はともしっかりした頭のキレる方で、最初そのギャップに驚いたほどでした。

俳優業だったのはその羽鳥さんくらい。これまでのスタッフは全て皆さんミュージシャンを目指す若者でした。今のスタッフもそうですがなぜかギタリストを目指す人が多かったですね。実際にプロとして活躍しているのは、最近ウチにも出はじめたシンガーの情家みえさんがいますが、プロになって活躍されている人は実は多くありません。すぐには食べていけないミュージシャンがプロになるには、そこそこ恵まれた境遇に生まれないとダメなのかしら。社会の理不尽さを感じます。

こんな人がいました。若くして亡くなりましたが、ウチで働きながらサックス奏者を目指して頑張っていた若者。都がたまたま募集した清掃局のゴミ回収のアルバイトを見て始めました。お店が閉まると早朝そのまま出勤して、都内から夢の島までゴミ回収車に乗って2往復ほど。帰ってくると職員用の大きな風呂に入り、職員用の食堂でお昼ご飯。午後には自由。時間的に都合だった以上に、公務員ですから給料はいいし盆暮れのボーナスもしっかりもらいます。ハングリー精神が萎なえてしまうのも無理ないほど良い待遇で、いつしか音楽家の道から遠ざかり、正式に都の清掃局員になりました。(就活フリーターの方、あまり人気がない仕事ですから逆にアナ場かもしれませんよ)。

南青山に引っ越してきた頃のスタッフだった鈴木くん。大学を卒業して新卒として働きはじめて2年ほどして、都合で実家に帰ることになった時。実家の1階を改装して小さなスナックをやりたい、ついてはお店の店名を使わせて欲しいと相談されました。何事にも一生懸命なジャズ好きの若者で、私も応援したくなって、いわゆる「暖簾分け^{のれん}」することにしました。今ウチに出演するミュージシャンもツアー帰りなどに時々立ち寄るボディ&ソウル藤枝店です。今は時々ライブもやっているようです。

そもそも新宿百人町の時代はレコードをかけるジャズ喫茶。六本木時代もBGM用にたくさんのLPレコードが常備されていました。今の自宅に引っ越す前のマンションは、地下に4畳半ほど広い各戸用の物置がある古いタイプ。そこには私がジャズに関わるようになってから溜まったたくさんのLPレコードとオーディオ機器が保存されて残っていました。商売柄、それは結構たくさんさんの量で、中には希少な輸入盤もあったかもしれませんが、それらは全て藤枝店にプレゼントしました。

最近はまだLPが復活しているようですね。当時はまだCDが全盛の時でしたが、40年間に音楽媒体もずいぶん変わりました。SPからLPそしてCD、iPodやウェブ配信…。私の自宅の近く渋谷にも、JAROという、ジャズのLPで有名な老舗がまだ健在です。人に聞くと、昔の貴重な輸入盤は何千円もするそうで、息を吹き返して繁盛しているとか。

「継続は力なり」まあ、ウチもその部類かもしれませんが。真空管アンプが見直されたり、1社だけ残っていたレコード針の会社も復活していると聞きました。かつてCDがLPに取って代わろうとしていた初期、毎夜お店で、BGMとして何時間もCDを聴くようになった時、LPとの違いがわかりました。音質の違いはよくわかりませんが、CDになってからなぜかとても脳が疲れるのです。LPの方が耳と脳に優しい感じ、疲れ方が違いました。いま復活している意味がわかります。

藤枝店の他、実はウチの名を冠したお店がもう1店あります。ボディ&ソウル用賀店。私の息子がワインの輸入代理業を営んでいて、ここはいわゆるワインバーです。ちなみに、北青山から引越す際、居酒屋として残して人に任せてあった、店名がボディ&ソウルの半分の「ソウルⅡ魂」は、4年ほど前に廃業しています。

40年間には、出演者とお客さま、出演者とスタッフ、あるいはお客様同士、いい仲になられたり結婚されたり、特に演奏者との距離が近いウチのようなお店は他に比べて多いかも知れません。中には道ならぬ仲になり…なんて危険な情事の興味深い話も少なくないですが、ここで書くのは、はばかれます。

ハッピーエンドの代表は、今NYと日本を行ったり来たりして大活躍されている私の好きなドラマー、ジーン・ジャクソンさん。ウチで知り合ったお客さまと何年間もの遠距離

恋愛の末、結婚されて今とてもお幸せそうです。お客様同士ウチで知り合って結婚された方もけっこういらつしやって、そんな二人の結婚記念日を、必ずウチでされる方が何組かいらつしやいます。

そうそう、長い間お店をやっていて最近特に変わったと思うことのひとつは、気象情報や自然災害に対する世の中の反応です。台風、雨風、雪、地震：情報量が多くなったのか、災害に弱い都市になったのか、情報の発信者も含めて「転ばぬ先の杖」が多すぎるように思います。会社でも早々と帰宅勧告が出されるとか。昔は、お客さまも皆さん帰宅を急ぐなんてこともなく…

ある大雪の日、当夜の出演は山本剛トリオでしたが、演奏者が楽器を運んで来られないかも、と思いライブ演奏だけ取りやめてお店を開けていました。夜が更けて、剛ちゃんがひよっこりやって来ました。住まいは芝、増上寺のかなり先の方ですから六本木までは歩いて小一時間はかかるでしょうか。雪の中やって来た彼は、パジャマの上にガウンだけ羽織った長靴姿。雪の様子を見に外に出たら、足が自然にウチに向かったのだとか。その寝間着に長靴スタイルでピアノの前に座ったのです。

電車もタクシーも走らず外は静かな銀世界。閉ざされた感じの中では、人間て妙に時間や空間に共有感ができるんですね。そんな雰囲気の中、剛ちゃんの綺麗なピアノが流れ、

ゆっくりと和やかな時が過ぎていきました。親しくなる時は、ちょっと非日常的な出来事がきっかけになる場合も多いんじゃないかしら。この夜のことではありませんが、雪の夜をお店で一緒に過ごし、夜が明けて雪を踏みしめながら駅まで歩いて、それがきっかけで……後で聞いたそんな話もあります。

「男女の出会いの場」もそうですが、若い才能が育っていくのには、いい「場」が欠かせません。ミュージシャンを目指す真剣な若者たちを見ていて、本格的ないいライブジャズの場を提供したい、という想いが次第に強くなりました。そしてジャズファンには、上質なジャズを上質な音で、本当にいいジャズ演奏を聴いていただく場を提供したい。お店をはじめた当初はただジャズが好きで続けていたにすぎない私の中に、いつしかだんだんそんな使命感のようなものが出てきました。

90年代平成の世になって、ジャズ・シーンに元気がなくなっていくのを肌で感じ、21世紀になるころからジャズクラブの老舗なんて言われるようになり、ジャズを取り巻く状況が様変わりし、リーマンショック以降デフレ経済が定着してくると、使命感が（と言うと少しおこがましいですけど）お店を続けている、と言ってもいいくらい。

先日ある番組で、いま人気の若きギタリスト小沼ようすけさんが、青山界隈を紹介するナビゲーターとして出た旅番組の中でウチを紹介して「ここに出て演奏していると、大物

ミュージシャンがシットインしてきたり、客席で聴いていたり、インスパイアされたりいい勉強にもなつて、僕を育ててくれた大切な場所」とお褒めいただき嬉しく思いました。私がいま使命と思っていることを端的に表現してくださいました。

ピアノスト守屋純子さんの著書に「なぜ牛井屋でジャズがかかっているの？」というエッセイがあります。守屋さんは私が大好きな演奏家・作曲家でいろんなオーケストラやコンボを率いて創造的な活動をされていて、最近はウチの年明け初日や開店記念日などのイベントに出演していただくことが恒例になっています。

その本の中で、日本では、ジャズは演歌やポップスより「格上かくうえの音楽」というイメージで店の格があがったように感じるのかも、と書いておられます。ランチを食べに来たお客さんに、レストランの片隅で行うジャズのライブ演奏を聴かせるチェーン店まで出てきました。いつ調律されたかわからないアップライトのピアノが、大昔に聴いた曲を同じように奏で、懐メロのようにジャズを聴く、そんなジャズやジャズファンがいてもいい。否定はしません。音楽は人それぞれ好き好きです。

でも私は、ジャズの本当の良さを知ってファンになってほしいと常々思っています。ジャズという音楽は、自由な演奏が許されてどんどん進化する奥の深い音楽、40年間同じ曲を聴いていても飽きることがない音楽。しっかりした高度な音楽理論を持つ素晴らしい音楽

です。そして耳の肥えたい聴き手がミュージシャンを育てます。逆にいいジャズファンを育てるのもミュージシャンの仕事です。出演者が毎回「Something New」に挑戦する真剣勝負の場、ウチはそんな場でもありたいと思っています。私が音の良さや演奏の質にこだわるのも同じ理由です。私が経験したNYでは、聴き手の反応がはっきりしています。いい演奏にはノリまくるし、よくない演奏には平気でブーイングして外に出るし。NYで鍛えられるということの中には、そんなこともあるかもしれません。

特にこの頃は、若いミュージシャンに限らず演奏できる場所や機会が「とりあえず」たくさんできました。NYより多いかもしれません。地域の活性化を目指す地方のイベントも多くなりました。特に地方のイベントは半年以上も前から企画されるようで、早くしないと名のある演奏者は押さえるのが難しくなり、このところ年々ブッキングも早くなっています（ちなみに今8月ですが、もう師走→正月の押さえに入っています）。

音楽大学に続々とジャズ科ができ、活動の場もプロの数も着実に増えてきています。だからこそミュージシャンを目指す若者や、プロとして活動し始めた方に言いたいことがあります。そこであなたは真剣勝負していますか、あなたの演奏に感動して鳥肌が立つお客さんがいますか、演奏の達成感に喜びを感じていますか。生活のために演奏することを否定はしません。でも安易にお金を稼いだりアルバムを出したりすることを先に考えないで、

初心のハングリー精神を忘れずに、自分が目指す音楽に向かってガンバってほしいと思います。(偉そうにゴメンナサイね)。

音楽は自己表現です。そしてすべての表現が目指しているのは、人を説得することだと思います。感動も共感も、私が思わず拍手するのも涙がこぼれるのも、それは私が説得されたということ。説得力は技術ではありません。ウマイヘタを超えて、聴衆をノセる技術を超えて、説得力の土台は人間力かもしれません。「人生は歌に表れる」沖繩在住で私と同年の与世山澄子さんの歌や、小曾根さんの「感謝の心」が溢れているステージを聴いていていつもそう思います。

ちよつと敷居が高い、と言われるは不本意ですが、ひとりのジャズファンとしてそんな場が日本にひとつくらいほしい。もちろんウチでジャズを楽しむのに、そんな想いや理屈を知ってないとジャズを楽しめないわけでも、私の考えや嗜好を押し付けるつもりも毛頭ありません。最近のご時世でしょうか、「癒やし」を求めていらっしゃるボーカル・ファンが多くなりました。音楽に求めるものが何であれ、それは個人の好きく。趣味や嗜好に優劣なんてありません。ウチの敷居が高いなんて思われなくなる時が、日本にジャズという音楽と文化が本当に定着した日になるのかもしれない。自分がやりたいこととビジネスの両立が難しいのは、どの世界でも(ウチにとっても)課題ですが。

転
載
ふ
ろ
く

♪ It's It's Easy To Remember

コルトレーンのアルバム「バラード」にも入っていましたね。
このアルバムの中ではこの曲だけパーソネルが違って、ベー
スがレジー・ワークマンさん。NY タウンホールで私を見つけてド
アを開けてくれた彼です（酷寒のジャズの章）

転載なんてイージーなやりかたで、すみません。

■転載ふろく

今年2015年、第5回東日本大震災支援ライブを盛況のうちに終えることができました。ゴールデン・ウィーク、5月の恒例イベントになったこの企画は、ベーシスト中村健吾さんが発起人・プロデューズで、大震災のあった直後に、ミュージシャンも何か被災者の子供たちの力になりたい、と始めたものでもう4年になりました。

10人のシンガーが皆さん手弁当で出演してくださり「競演」するエキサイティングなチャリティーです。集まる義援金はそんなに多くはありません。でも、多くの深く静かな情熱があなたを忘れず支えている、そんなメッセージと想いが、震災で親を亡くされた子供たちに伝われば……と彼らが成人するまで、息長く続けていきたいと思っています。

その今年、石巻^{いしのまき}の被災地の方が、こんな素晴らしい支援を続けてくれていることを知らなかったけど、もう4年になるのですか。感激です、とご来店された折、お礼にとスウィングジャーナル誌に1年間私が書いていたコラムのページを、綺麗な小冊子に手作り製本して贈ってくださいました。掲載時期は平成元年とあります。ちょうど27年前ですね。

スウィングジャーナル誌は、かつてはジャズファンのバイブルのような、権威も部数も一流の雑誌でした（今はもうなくなつてJAZZ JAPANという雑誌になりました）。

ずっと以前ですが、思いついてバックナンバーを欲しい、と雑誌社にお願いした際には、倉庫の奥からやつと探し出して、1冊しかないからとコピーしてくれたことがありました。雑誌社もなくなつた今は、もう全て廃棄されていると思います。石巻のその方は相当なジャズファンに違いありません。バックナンバーが全て保存されてるんでしょうね。

改めて読み返してみると、当時のライブハウスをとりまく時代の空気やら、今はベテランと言われるミュージシャンの若き日の姿やら、故人となられた方々や…私も随分若かつたなあ、ナンテ。なつかしいやら、ちよつと気恥ずかしいやら…

ちようど、この本を書くにあたって構想を練っている時でした。せっかく貴重なバックナンバーを入手できたのだから過去を思い出して書くより、そのまま転載したほうが当時の時代の雰囲気とともに伝えられるんじゃないか、と。(今は便利な時代になって、コピーした記事がそのままテキスト文になると聞いて、ますます私のズボラが出てしまいました)。コラムを書いた時期は私がまだ40代。生意気な時期で、少し横着などころもあつたせいかしら、ミュージシャンに敬称をつけなかったり、失礼なことなども書いていて直したいのですが…あえて、何も足さず何も引かず、加筆・修正しないで何篇かを抜粋してそのまま転載します。それを読んで、成長した(笑)今の私が補足して注釈や思いついたことを書いてみます。

スウィング・ジャーナル誌コラム

1989年（昭和64年＝平成元年）1月号

今回からスタートするこのコーナー。日頃繰り広げられている六本木のジャズ・シーンをさまざま角度からリポートしたいと思っています。ジャズメンの熱演ぶり、知られざるエピソードなど、さてどうなりますことやら。

さて一回目の今回は、このあいだ大成功のうちに幕を閉じた「六本木ジャズビレッジ」の裏話でもしましょう。

この企画が現実味を帯びてきたのは、ほんの数力月前。マリーンの事務所独立パーティーの席。「サテンドール」の井上氏、博報堂PR局の柴田氏らとお酒の席で勢いがついたわけです。初の試みなので、スポンサー探したいへん。幸い、音楽に理解のあるサントリー、ジャックダニエルにガンバってもらうことになりましたが、さてこのイベントの目玉を何にしようか…。NYのビレッジではこういうフェスティバルが成功していると聞いていたので、とにかくNYに飛ぶことになりました。

NYではたくさんの方の若手ミュージシャンと連絡をとりはじめたのですが、彼らのマネジャーらのいいかげんなことといったら…朝から晩まで連絡待ちの毎日。これじゃあラチがあかない、とライブハウスのオーナー達と会うことにしました。さっそくエディ・ゴメスといっしょに、この業界の大御所「ビレッジ・バンガード」のマックス・ゴードンに会いに行ったのですが、

もうケンもホロロに断られました。曰く「世界のバンガードが、なんで東京くんたりのライブハウスをヘルプしなくちゃならないんだ」…あゝ、このガンコさが長年この店を支えてきたんですね。「スウィート・ベイシル」のオーナー夫妻とはとてもうまくいきました。でも日本で名の知れたミュージシャン達との交渉はなかなか進展せず、時間もないしイライラ気が気ではありません。

こうなったら長年きたえた自分の耳を信じるよりしょうがない。テープを聴いたりライブハウスを回ってデキる若者を探したそう…。そうして見つけました。「ボトムライン」で叩いていた17歳のザック、ハーバーブラザーズのテープに入っていた20歳のステイブンとジャスティン、25歳のウイナード…みんな初来日とあってとても喜んで参加してくれました。日本のミュージシャン達ともとてもフィーリング・グッドでした。

すんでのところで企画倒れになりそうな、かなりアプナイ橋を渡り歩いたわけですが、ま、そこが世に言う「女のクソ度胸」われながらとても疲れました。でもそれは、終わってみると快い疲れではありましたが…。

この年は、昭和天皇がお正月過ぎに崩御ほうぎょされて、すぐ元号が変わりました。ですから昭和64年はほんの10日ばかり。昭和が終わり平成がはじまったのですが、前年の暮れに天皇陛下のご病状が悪化してから、この1年間はテレビでも街のイベントでも、会社や町内会の新年会やお花見に至るまで「歌舞音曲かぶおんぎょく」が自粛されて、世の中は自粛ムードいっぱい。このコラムの掲載は、その年でした。

ハーバーブラザーズとはウィナード・ハーパー(H)とフィリップ・ハーパー(P)の兄弟バンド。この時の「六本木ジャズビレッジ」が初来日だったのがウィナードさん。グレゴリー・ハッチンソン(G)さんも一緒に初来日しました。ステイブ・スcott(S)さんは今ロン・カーター(C)さんと組んで、ジャズティン・ロビンソン(R)さんはロイ・ハーグローブ(H)さんと組んでいて…皆さん、今ご活躍中です。

「六本木ジャズビレッジ」とは、フリーパス・チケットでイベント参加ライブハウスを自由に入店して聴ける、今と言うクルージング・イベントです。ジャズのメッカが新宿から六本木に移った当時、もちろん日本で最初の試みでした。NYからミュージシャンを招請して2年間行われ大盛況でしたが、予算がかかり3年目からスポンサーがなかなかつかず、やむをえず取り止めになりました。

何ですか、去年一年は「高天原景気」とかいって、とても世の中景気がよかったみたいですが、当「ボデイ・アンド・ソウル」にはちっともその風が吹いてこなくて、どうしてかしら。偉い先生が、豊かさを楽しむ味を知った、なんて分析してましたけど、本当かしら。みんな住宅をあきらめて、クルマやテレビを買っただけよね。とてもジャズを楽しむまでは余裕がなかったみたい。それに、お金のあまった大資本がライブ・ハウスの経営に、至るところで乗り出したんです。ジャズを好きでもない人たちが、金にモノを言わせて。困ったものです。小さなお店は、アタマとハートで勝負です。たとえば、もう恒例になっているクリスマス・イブのユカイな仮想パーティー、それでは紹介します。「デン助劇場」の主役になった気のピアニスト山本剛、劇画から抜けだしてきたようなちょっとヤクザなベーシスト岡田勉、ニユーヨークのイーストビレッジをほったき歩いてるアル中ドラマージェス倉田、MCホストリートに立っている風のシンガー上野尊子、私も帽子とメガネとヒゲをつけ、コメディアンとしてガンバってみました（写真紹介）演奏はクリスマスソングを中心に、お客さまを乗せまくります。ラストステージは伊藤君子も飛び入りし、イブの夜は最高潮に達し夜はふけてまいります。お客さまには心のこもったクリスマスプレゼントができました。

ところで12月25日は、何をかくそう私のウン回目の誕生日。宴も終わるころジェイ・マク

ガバンがかけつけ、弾き語りで「ジャスト・セイ・アイ・ラブ・ヒム」と「ハッピー・バースデー」を歌ってくれました。とてもすばらしく、涙がホロリ。小さな店だけど、ライブハウスをやってよかったな…。大資本に負けずにガンバろう、と思う今日このごろです。

もう30年近く前、バブルがピークだった頃ですね。土地神話も健在で、とにかく住宅が高騰して自分の持ち家を持つことは夢のまた夢でした。黒人シンガー（の卵）だったジェイさんは、声質もグループ感も素晴らしく、いずれジャズシンガーとして大成するに違いない、とりあえず日本でデビューさせたい、と働きかけていたのですが、家庭の事情でブルックリンに帰らざるを得なくなっていました。ソーシャルネットワークの時代になって、最近ようやくその所在や暮らしぶりがわかるようになりました。今は子育ての傍ら時々ピアノ弾き語りで小さなクラブに出ているようです。

その頃いつも連れ立って来ていた彼女の親友でモデルだったヨランダさんは、ジェイムス・ディナス(☺)さんとご結婚。最近は旦那様の来日公演で一緒に来てウチに寄られます。ジェイさんとヨランダさんは、私の記憶は二人がひとまとまり。だから二人の人生の分岐点を思うと感慨無量です。ジェイムスさんは、小曽根真トリオの初期のメンバーでした。

岡田勉さんジェス倉田さん上野尊子さん…皆さん故人になりました。

降る雪や昭和は遠くなり…もう5、6年するとこんな感じになるのでしょうか。昭和が終わったその日も、平成の始まったその日も、当ポディソウルには普段と変わりなくジャズが流れていました。でも、いい機会ですから、今回は、私のまわりのジャズ昭和史を綴ってみたいと思います。

それは、昭和35年頃から始まります。まだ日本もみんなも貧しくて、私も楽しみといえばジャズ喫茶に100円もって行ってコーヒー飲みながら、その店自慢の輸入盤を聴くことでした。もちろんライブをやっているところなどなく、時々キャバレーやクラブが休みの日、ジャム・セッションがあるくらいでした。

昭和38年歌舞伎町のある喫茶店の4階がいていたので、「ジャズ・コーナー」というライブ・ハウス（後の「タロー」）をはじめたのです。ピアノはアップライト、PAなしの全部ナマの音でした。初めは学生バンドでしたが、そのうちにプロに占領されて本格的なライブ・ハウスになりました。そのころの顔かれは、日野兄弟、ジョージ大塚、菅野邦彦、今田勝、鈴木宏昌…みんな貧乏でした。でも、みんな輝いていました。そのうちに日野皓正4、ジョージ大塚3、菊地雅章4などのグループが誕生したのです。その頃です。渡辺貞夫が帰国して、ボサノバが大流行、どこで演奏しても大入り満員でしたっけ。

そのうち、ジャズはやっぱリニューヨークじゃないかとばかり、日野が渡米。あとを追うように、鈴木良雄、日野元彦、岸田恵一、益田幹夫、山本剛、川崎燎、増尾好秋…と次々行つてしまいました。そのころのパークリー音楽院は、入学するのがたいへんで、渡辺や秋吉、佐藤允彦、そしてタイガー大越など、それだけで話題でした。

昭和50年頃新宿はジャズの街。ハングリーな若者たちばかりで、熱い空気に満ちていましたが、高度成長で豊かになるに従って、ジャズも熱さを失っていったように思います。そうして、六本木にジャズのメッカが移っていくとともに、ジャズはオシャレにおとなしくなつたようです。今日もどこかでコンサートがあり、ニューヨークと同じようにジャズ・クラブがあり、情報もあふれていると、近頃、心の底から感動することも少なくなつてしまいました。そんななかで私が今、注目して聴いているバンドは板橋文夫、井野信義、村上寛、峰厚介の面々。このメンバーがそろった時はスリリングに楽しめます。今度、村上寛のプロデュースでライブ・レコーディングのCDが出るそうですので、ぜひ聴いてみてください。

さあ、平成時代。ジャズは、どう変わるでしょうか…活きのいい新人、い出よ。

川崎燎(ろ)さんはウチが南青山店になってからですが、ひょっこり来日し出演されました。NYで活躍後、今、エストニアにいらっしゃいます。日本人は二人しかいない街だそうです。

1年ぶりに、真夏のマンハッタンに行ってきました。今回の旅は、秋に行なわれる第2回六本木ジャズ・ピレッシのプロデューサー、という名刺をいただいて、出演ミュージシャン探し。いわば「人買い」の旅です。だから中5日という強行軍で毎日毎日、活きのいいミュージシャンを探してのジャズ・スポーツ巡りです。現地案内役は、ブルックリンに住んでいるセシル・モンローの弟さん、エディ・ゴメスさん、その他いまNYにいる友人たち。当たりを付けていた人たちは、ほとんどがツアーに出ていて、人探しも大変でしたが、でも、ま、なんとか無事に役目を終えてきました。というわけで、今回は、最近のNYと日本のライブ・ハウスの違いや、感じたことなどを綴ってみました。

むこうのクラブは、ご存じの方も多いと思いますが、オープンするのが遅くて夜9時半ごろから深夜3時半頃までの3ステージ。「ブルーノート」や「スイート・ペイジル」では、土曜・日曜は昼もやっていますし、朝5時までジャムをやっているところもあります。老舗「ピレッシ・バンガード」では、1stセットなど観光客ばかり。さて、新人を探そうと、「ブルーノート」のジャム・セッションに行ったのですが、素人以下の人たちが入れ替わり立ち替わり。とにかくそのヒドサに呆れかえって、早々に退散しました。友人によると、ちゃんとジャズのわかる人たちは、もう誰も行かないそうで、私は信じられない営業をしているなと思いました。

それから「ニッティング・ファクトリー」が新しくいい、と聞いたので行ってみましたが、なんだかわけのわからない人たちがタムロしていて30年前の新宿を見るようで、ここも早々に退散。そんななかで、私が今回一番いいと思ったのは、「ブラッドリズ」でした。

こじんまりとしていて、PAもほどほど、とてもいい感じ。ちょうど顔見知りのケニー・ワシントンがピアノ・トリオで出ていました。3時を過ぎると、仕事の終わった人が集まってきた話はずみ、ちょっとウチのお店のような雰囲気で、私には居心地がいい感じでした。それから、ロン・カーターのデュオや、ジョー・ヘンダーソン、アル・フォスター、アート・ファーマーなど、大物も聴いたのですが、とりあえず感動するものはありませんでした。なかで、1日だけピーコン・シアターで開かれていたCBSソニーのオール・スタッフによるチャリティ・コンサートは、とてもすばしかったです。リズム隊がスティープ・ガッドとエディ・ゴメス。そしてグローバー・ワシントン jr. とラムゼイ・ルイス。若いオルガンやバイブ、ギター……と、次代になうエネルギーを感じましたね。いずれにしろNYでは、お客さんの反応がはっきりしていて気持がいいですね。よくない演奏にはシラケて外に出るし、いい演奏にはノリまくるし。

以上、今回は急ぎ足で回ったのでレポートも急ぎ足になってしまいました。アシからずう承ください（ナンテ）。

当時はブルーノートがワシントン・スクエアの側^{そば}に1号店ができて5、6年の頃。当初は有名なあのジャズ・レーベルとは何の関係もないクラブでしたが、そのネーミングのせいか大成功して、その後世界展開していわゆるチェーン店が世界各地に出来ました。つまり当時のジャズ業界では「新参者」で、名のあるジャズメンはほとんど出ていませんでした。「ブラッドリズ」はもうありません。グローバー・ワシントンJr.さんはお亡くなりになりました。

7 追記

実は最初、1年間のコラムをすべてここに転載してみました。すると文量がやたら多くて紙面を占領してしまい、推敲のため読み返してみると…自分でも読んで疲れてしまったほど。イージーウェイはいけませんね（反省）。コラムとして残っていないければ、とても思い出せないエピソードもあったのですが、それはこの本のネタに使うことにして、4篇だけ抜粹することにしました。

あとがき

♪ Don't Explain

ビリー・ホリデイの作詞・作曲「言い訳しないで」。多くのシンガーや演奏家にカバーされている古いスタンダード・ナンバーです。

書籍は実はあとがきが一番おもしろい、と言われることもあります。あとがきから先に読む読書家もいるくらい。この章は（おもしろいかどうかは別にして）この本の内容に関してミュージシャンや読者の方に、言い訳させていただきました。先に読んでいただいてもかまいません。

■あとがき

この本に登場した方は意図があつて取り上げたわけではありません。特にミュージシャンの方、「私の名前が出てこない……」なんて思わないでくださいね。あまりに長い間の多くの方との関わりですので、それなりに整理しないと書ききれないこと、ご了承くださいませ。今ウチには年間350人以上のミュージシャン（述べ人数ではありません。うち、初出演とか何年かぶりとかが30人ほどでしょうか）が出演されています。そんな現役の方や身近なミュージシャンの話題エピソードとなると、ご本人のご了解をとらなくていいかしら……と筆が止まります。内外を問わず、ウチを訪れここに登場しないビッグ・ネームの方も多いですが、故人や外国の方に偏かたよつてしまったり、昔の話題が多いのもそんな理由かもしれません。

この業界、特にジャズ業界にはスキャンダラスな裏話や秘話や愛憎劇がゴマンとあります。男女の「相関図」を描いたら込み入った一大絵巻物になるくらいです。男女の関係ですからそれはボーダレスで「エッ、あの人とあの人が?」「ウソッ、そんなことがあったの」と驚かれる話には事欠きません。相談も受け、当人と私しか知らないことも結構あります。男女の関係や痴情の果ての警察沙汰ならまだしも、特に昔のジャズメンの世界や海外のミュージシャンには、話したら後ろに手が回りそうなこともあります。（今のミュージシャン

ンは高学歴になり、生活も本当に健康的になりました)。そのテの裏話はとても興味深いことだらけ。私はそれらを身近にたくさん見聞きしてきました。それを暴露すれば、それはそれは数倍面白い読み物になったかもしれません。

それらを期待された方には申し訳ありませんが、私は個人の私生活に触れることや噂話は好きではありません。これまでも(これからも)一切しない主義で長い間やってきました。複数の愛人を日替わりで連れて来ても、それなりの対応をしてくれるから安心だ、なんて言われたお客さまもいますが、これは水商売・客商売の鉄則ですもの。どうぞ安心してくださいね(って、浮気の場合を提供しているわけではありませんけど)。

特にアーティストだから寛大というわけでもありません。私生活や下半身の事情などと音楽活動とはあまり関係ありませんから。それに、これまで多くのミュージシャンからいただいている信頼を、音楽以外のことで裏切ることはできませんしね。それらはお墓まで持つて行くことにしています。

私もそろそろ「終活」を意識する歳になりました(古希こきをとうに過ぎましたからね)。記憶の薄れた脳に鞭打ってガンバって綴ってきたもうひとつの理由は、私の孫に、私のジャズクラブオーナーとしての40年間を残しておきたい。毎月く、資金繰りに四苦八苦する一輪車操業で、残す資産は何ひとつないのだから、せめて成長した日の孫のために…

ちなみに、私の孫は奇しくもお店を始めた32年目の開店記念日（8月8日）の夜に生まれました。これも何かの因縁だと思っています。ホームページの私のブログ「デイリーレポート」や、隔週で配信している「BS通信」にも時々登場する「レイくん（鈴木太郎）」です。この春（2015年）小学3年生になりました。いま彼は「ピアノが弾けるサッカー選手」への夢に向かってガンバっている最中です。どんなふうに成長するにしろ、彼の成長に接するのが、今の私の「元氣のもと」なのです。

拙文をお読みくださって、どうもありがとうございます。なにぶん古い話が脈略なく浮かんできて整理がつかず、話が前後したり、時々左右したり、時々重なったり：読みにくかったこと、ご容赦ください。

こ こ だ け の 話

♪ Speak Low

もともとはボーカル曲ですが、多くの演奏家がカバーするスタンダード・ナンバー。昔ジャズ喫茶ではウォルター・ビショップ・ジュニアの横顔のジャケットがよくかかっていたつけ。ジャケットタイトルも同じ。このジャケットがかかると、騒がしい客に「もう少し小声でしゃべれよ」と注意されてる気がしました。

この章は、そんな耳打ち話です。

■ここだけの話

最後の最後に「秘話」をもうひとつ。

最初に店名の由来をお話しましたが（社歌の章）実はその時、店名を決め、マークを息子に描かせた、カウンターで飲んでた常連さん。実は彼が、その後私が再婚した今の主人なんです。この本に時々出てくる「ある人」というのは今の主人。広告代理店に努めてディレクターをやった「ある人」（どさくさにまぎれての章）というのも今の主人。

当時彼は学生運動をやって大学をドロップアウトした元過激派の闘士で、卒業後もしばらく定職にもつかず女にふられたとかで（詳しくは知りませんが）……とにかく新宿を根城にプーターロ生活。ほとんど毎晩、私がアルバイトで「タロー」と掛け持ちしてたお店に来て、お店が終わる深夜過ぎまで飲んだくれていました。

そんな主人の存在をこれまで公にしたことがなく、付き合いの古いミュージシャンと関係者以外、ご存じの方はほとんどいないと思います。でも、ボディ&ソウルファミリーや古くからウチに出ている関係の長いミュージシャンは主人をよくご存じです。

去年、40周年でお店を改装することになった時、当時まだ学生で新宿百人町にあった頃からよくいらしていた設計家の常連さん。大手の建築会社に入り退職した今は大学で建築

学を教えています。その方に改装の相談や設計のお願いをしました。その方と主人を引きあわせたのも昨年のこと。「エッ、あのころから二人はできてたの?」。時々いらしていたのに40年目にして初めて知って大層驚いていましたけど。

当時も今も、主人は根がシャイで人見知りが激しく、特にお店では人前に出るのが好きではありません。(ソーシャル・ネットワークでさえ、こつ恥ずかしくて…とか) お店に顔を出すのも月に数回。人の顔と名前を覚えるのも大の苦手。その点私は一度いらしたお客さまの顔と名前はすぐに覚えられます(最近でこそ歳のせいでめつきりダメになりましたけど) 主人にはよく言われました「キミは客商売をするために生まれたような女だ」。

一緒になる時に「水商売・客商売は所詮女にはかなわない。だからオレは自分のやりたい仕事をする。表には出ないけれど陰でお店を支える」とその後長年、広告代理店に勤めていました。最近リタイアしましたが40年間お店の改装や引っ越し、あるいは契約や交渉事などのブレンワークは全て主人に任せて今があります。

経営面でも助けてくれました。ジャズクラブなんて決して儲かる商売ではありません。♪「ショウほど素敵な商売はない」なんて楽しそうに見えますが、貧乏暇なしで苦勞ばかり。やるもんじゃありません。私が一貫してビジネスを二の次にして好きなようにやってこられたのも、主人の稼ぎがあつたからかもしれません。

この本も、私がメモ書きしたりしゃべったりしたことを主人がリライトしてくれたものです。もっとも私は40年間、いろんな出来事はほとんど逐一リアルタイムで主人に話していましたから、ほとんどの出来事の記憶は共有されています。NYや、根室のジャズフェスや、あるいはゴルフなど、時々主人もミュージシャンと一緒に行きましたから、主人が覚えていてくれた話も数多くあります。記憶は主人のほうがずっと確かですから。この本が「共著」というそれが意味です。

ちなみに、主人の好みのジャズや好きなミュージシャンの傾向は私とよく似ていて、ジャズ黄金時代のバップ系のストリート・アヘッドなものが好きなようです。ジャズだけでなく似ていると思うのは、主人も私も物質欲に淡泊なこと。彼はもっぱら「機能主義」で、蓄財はもとより、ブランド品や装飾品には全く興味が無いこと。私も、いいものは身につけたいとは思いますが、宝石類やバッグやアクセサリを手に入れたと思ったことはありません。いいジャズが聴かれれば、人生満足なのです。

ことさら隠してきたわけではないんですけど、そんなに大っぴらに話すことでもない、ここだけの「おまけ話」でした。

7 後記

六本木時代、時々いらしていた方で（私は記憶にありませんが）ピアニスト山下洋輔さんと親交の深かった故平岡正明という評論家がいたそうです。彼の著書に「山口百恵は菩薩である」という本があつてそこに「時代と寝た女」という表現があるそうです。

主人は、この本の書名を「ジャズと寝た女」にしたかったようです。冗談じゃないワ。でも身も心もジャズの人生って、そういうことかもしれませんね。

（2015年8月末 脱稿）

〈1965年〉

オーナー関京子、日本で最初のジャズライブハウス「タロー」を新宿歌舞伎町に開設。冷房施設のない時代、氷柱を置いて冷気を出し熱きジャズに浸る…そんな日本のジャズ草創期を、ライブハウス「タロー」のオーナーとして過ごし、また無名の菊池雅章、日野皓正…等、後に日本のジャズを背負うことになる多くのミュージシャン達との親交を築く。

〈1974年〉

新宿百人町に、レコードでジャズを聴かせる深夜ジャズ喫茶 BODY&SOUL を開店。

〈1977年〉

BODY&SOUL を六本木交差点に移転しグランドピアノを設置。ピアノの弾き語りをメインとするライブ演奏を始める。やがてドラムセットなども設置し、ライブ演奏を本格化させていく。この頃からツアーなどで来日するビッグネーム達が訪れるようになり、BODY&SOUL の存在がNYなどでミュージシャン仲間に口コミで広まるようになる。

〈1985年〉

この六本木店を弾き語りスタイルのお店から、ライブ演奏のできるお店に改装し、本格的なライブハウスとしての地位を築き始めていく。「東京ジャーナル」（外人向け情報紙）で東京ZOOのジャズライブハウスに選ばれてから、外人固定客も増加。その後「東京ジャーナル」紙には、対談そのほかで経営者としてだけでなく、ジャズ文化を基礎にした文化交流の担い手として登場するようになる。その関係もあり元駐日アメリカ大使アマコスト御夫妻をはじめイタリア、オランダなどの大使館員の社交の場としても機能し「アメリカ大使館公認遊興施設」の特典を得ることとなる。

〈1986年〉

ステイプガッド、エディゴメスらをBODY&SOUL独自で初めて招請。以後エディゴメスには、事あるごとに出演してもらう仲となっている。

〈1987年〉

内外の多数のミュージシャンを集めて開催された、複数のライブハウスを動員したジャズのコンサートイベント「六本木ジャズビレッジ」を総合プロデュースし成功を治める。単身渡米し新人発掘と招請にオーガナイザーとして活躍する。

〈1988年〉

「スウィングジャーナル」誌に1年間「六本木オンオフ」というコラムを連載、ジャズ文化を語る。そのほかさまざまなミュージシャンのライナーノーツをはじめ、コンサートのプログラム等を執筆する他、ジャズ専門誌はじめ一般週刊誌の取材等に多数登場する。

〈1990年〉

（この頃、ブルーノート東京、原宿キーストンコーナー開店）

TBSテレビの30分番組「すばらしき仲間たち」にジャズシンガー伊藤君子とともに出演。店内での演奏風景と合わせて放映される。この頃から、テレビドラマの舞台としてピアノ弾き語りシーンなどにたびたび店内を利用されるようになる。ジャズ好きな作家との親交も深まり、例えば故色川武大氏のエッセイ等にも登場している。

〈1991年〉

店舗を六本木から北青山に移転。

〈1992年〉

店舗を現在地の南青山に移転。

〈1993年〉

「JAPAN TIMES」にオーナー関京子が日本のジャズシーンについて語った記事が1ページ

掲載される。近隣のブルーノートなどに出演のため来日するほとんどのミュージシャンはすでに旧知の間柄となっており、当然のようにこの小さな店を訪れ、アフターアワーズを楽しんでいくのが常となった。そして、本国でも実現しないようなジャムセッションが始まるユニークなライブハウスとして、内外で知られるようになる。若い無名のミュージシャンでも、見所があると出演させ、積極的にデビューをお手伝いする。そんな中に、トースト小沼ようすけ、秋田慎治…等がいる。関京子の「音」に対するこだわりは、ライブサウンドの良さとしても定評があり、数々のライブレコーディング盤として結実している。

〈2004年〉

BODY&SOUL 開店30周年を迎える。夏に記念イベントとして1週間、エディコメスとグラディテイトを招き、日本のミュージシャンとの共演イベントを開催。12月には小曽根真4Daysを開催し、大盛況のうちに終える。

〈2006年 2007年〉

関京子、NYで開催されたIAJE (International Association for Jazz Education)に参加。多くのミュージシャンと旧交を温める。

JAL 機内に、BODY&SOULのチャンネルが常設され、機内において、いつでもライブレコーディングされたジャズが聴かれるようになる。

〈2007年 2008年〉

【BODY&SOUL レーベル】CD群をリリースしはじめる。このレーベルはジャズミュージシャンが自身の音楽をCD化する機会、あるいは、広く世の中にデビューする機会が非常に少ない、という現状を何とかしたい、というオーナー関京子の熱い想いをカタチにしたもの。収録曲の全てが、BODY&SOULにおいてライブ録音され、各CDは設定したテーマに添って複数のグループ・ユニットを抱き合わせて1タイトルのCDに納める…ボディ&ソウルならではの企画性・話題性に富んだ、これまでにないユニークなレーベルである。

〈2009年〉

BODY&SOUL 誕生35周年記念イベント、開催。

4月に35周年記念スペシャル第1弾として【小曽根真 3Days】を。8月には記念イベント第2弾として【JAL協賛 スペシャル1ウィーク】を開催。

〈2014年〉

8月、40周年を迎えたのを期に老朽化した店内を改装。ホームページなどもリニューアル。将来の会員制ジャズクラブを目指して、当面「サポーター・メンバー」を募集。5日間の改装工事終了後、10月、リニューアル・スペシャル・イベントとして「小曽根真 3Days」を行い大好評を博す。

〈2015年〉

今秋11月、台湾から招請されてジャズクラブのオーナーとして、ジャズやミュージシャンに関することを講演することになっています。

最近の世の中を反映して、ウチにも台湾からいらっしゃる方が多くなりました。その中に、ライブのお店や豪華なレストランを持つ富豪のオーナーの協賛を得て、台湾のジャズ文化の振興に熱心にご尽力されている方が何度もウチを訪れてくださって、日本と台湾のミュージシャンによるジョイントコンサートなどのイベント企画の話が進みました。その一環なのです。私はそんなことを語れる人間ではない、と最初は固くお断りしたのですが、何でも、いろんなアメリカのジャズ関係の紙誌を読んでいると、BODY&SOULやSyoko Ownerのことがさまざま出てくるんだそうです。それで多分、私を買いかぶったのかもしれませんが。彼のジャズへの熱意にお断りしきれなくて、大それたことを引き受けてしまいました。

11月にはTOKU(w.o.h.)さんとトニー・サックス(♫)佐藤ハチ恭彦(♫)山田玲(♫)さん、そして私の通訳をしてくださる、いま、海外ミュージシャンの来日時のマネージャーとしてご活躍中のまゆみギルフォイルさんとで行くことになりました。

経済だけでなく将来は「中国パワー」がジャズの世界を席巻するかもしれません。ホームページでご報告します。乞うご期待。

身も心もジャズ

ジャズクラブ ボディ&ソウルの40年

2015年10月10日 初版 第一刷発行

著者 関 京子 有賀 教 (共著)

発行所 ブイツーソリューション

〒466-0848 名古屋市昭和区長戸町4-40

電話 052-799-7391

FAX 052-799-7984

印刷所 モリモト印刷

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替えいたします。

小社宛にお送りください。

定価はカバーに表示してあります。

©Kyoko seki, Satoshi Ariga 2015 Printed in Japan ISBN 978-4-86476-351-6